
共働き30歳の家づくりの意識

調査報告書



旭化成ホームズ株式会社
くらしノバージョン研究所
共働き家族研究所

目次

はじめに……3

第Ⅰ章 社会背景・調査概要……4

| | |
|--|----|
| 1. 増加が加速する共働き世帯……5 | |
| 1-1. 共働き世帯世帯数の推移 …………… | 5 |
| 1-2. 結婚・妊娠・出産後も復職して働き続けることが浸透 …………… | 6 |
| 2. 30歳前後で家建てる世帯の比率が増加中……9 | |
| 2-1. 上昇する持ち家率の変化に着目 — 持ち家取得の若年化の傾向 — …………… | 9 |
| 2-2. 住宅業界では25～34歳世帯の住宅着工比率の上昇が顕著 …………… | 11 |
| 3. 第一子出産前後での「女性の働き方モデル」と「居住モデル」の変化……12 | |
| 3-1. 「女性の働き方モデル」と「居住モデル」は変化している …………… | 12 |
| 4. 調査概要 30-0 DEWKSの家づくりの背景や生活意識を調査……14 | |
| 4-1. 30歳前後の共働き世帯＝30-0 DEWKSに着目 …………… | 14 |
| 4-2. 調査目的 …………… | 14 |
| 4-3. 調査概要 …………… | 15 |
| 4-4. 分析対象 …………… | 15 |
| 5. 30-0 DEWKSとはどんな人？……16 | |
| 5-1. 30-0 DEWKSの基本的な特徴 …………… | 16 |

第Ⅱ章 なぜ、30-0のタイミングで家建てるのか？……18

| | |
|--|----|
| 1. 家建てる背景に「長期の将来計画」がある 将来を見越し、「人生の全体最適化」を目指している……19 | |
| 1-1. 「将来のことを考え始めた」ことを起点に家づくりが始まる30-0 DEWKSと、 「将来の見通しが立った」ことを起点に家づくりが始まる40-6 DEWKS …………… | 19 |
| 1-2. 住空間だけでなく、人生を「全体最適化」するアドバイスニーズがある。 …………… | 21 |
| 2. 「早期建築・長期居住」の価値観……22 | |
| 2-1. 30-0 DEWKSが感じる「今、建てるメリット」は長期的な住宅コストの確定 …………… | 22 |
| 2-2. 30-0 DEWKSが感じる「今、建てるデメリット」は「未確定」がキーワード …………… | 25 |
| 2-3. 「今は漠然としているが確実に来る将来」が不安 — 30-0 DEWKSの不安感を探る — …………… | 28 |
| 2-4. 老後まで長く住めることが、長持ちする住宅の価値 …………… | 29 |
| 2-5. 「今」の不安に答え、「ずっと住める」住宅を取得する …………… | 30 |
| 3. 共働きで支え合う生活設計……31 | |
| 3-1. 共働きのハードルに変化 — 「働く困難さ」から「希望のキャリアを形成する困難さ」へシフト — …… | 31 |
| 3-2. 「家計」も「家事・育児」も支え合うという夫婦の共通認識 …………… | 33 |
| 3-3. 働く目的の世代間ギャップ — 働くことで成長していくという意識 — …………… | 40 |

第Ⅲ章 30-0 DEWKSの家づくりの課題……44

| | |
|--|----|
| 1. 30-0 DEWKSのLDK 散らかりがちで、気になっている……45 | |
| 1-1. 30-0 DEWKSのLDKの実情 …………… | 45 |
| 2. 30-0 DEWKSと畳の部屋 育児期には特に、畳の部屋に人と物が集まる。……47 | |
| 2-1. 30-0 DEWKSの65%がLDKに隣接した畳部屋をつくっている …………… | 47 |
| 2-2. 畳の部屋は高評価 …………… | 49 |
| 3. 子ども部屋の使い方の実態 「子ども部屋」は最初の10年は「おとなの多目的部屋」……50 | |
| 3-1. 子ども部屋は建築当初から多目的利用を想定 …………… | 50 |
| 3-2. 「子ども部屋」は子どもが専有するまでの期間は「おとなの多目的部屋」 …………… | 51 |
| 4. 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案 余白を活かした60年間の住みこなし……52 | |
| 4-1. 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案 …………… | 52 |
| コラム：可動家具とは……58 | |



はじめに

平成元年（1989年）、共働き家族研究所を発足し、来年で30周年を迎えます。1989年当時、およそ800万世帯であった共働き世帯（※1）は現在、1,200万世帯に達しようとしており、専業主婦世帯（※2）の1.9倍にあたります。

研究所はこの間、都市における共働き家族の意識と社会の変化を見つめながら、将来の家族像、住まいのあり方を研究し続け、家族が家事・育児をシェアしやすい戸建て住宅の設計ノウハウや共働き夫婦のニーズに即した賃貸住宅の間取りの提案等を行ってきました。

近年、高齢化や晩婚化の影響で、「単身世帯」数の割合が増加し、「夫婦二人、若しくは夫婦と子どもから成る世帯」数は減少しています。少子化の影響もあり、20代後半から30代前半の年代で、減少の傾向を強めています。一方、住まいに目を向けると、この年代で「夫婦と子どもから成る世帯」の持ち家率はここ数年で増加する傾向にあることが分かりました。この背景を調べてみると共働きの増加が一つの要因のようです。

今回、このギャップに着目し、活発に持ち家取得を行う20代後半から30代前半の、子育てをスタートした前後の共働き世帯の生活意識や、くらしの実態について調査致しましたので、その結果をご報告致します。

今後も様々な切り口で調査研究し、継続的に情報発信していく所存です。
尚、本調査にご協力いただきました方々に深く感謝し、お礼申し上げます。

平成30年11月

旭化成ホームズ株式会社 共働き家族研究所
所長 木戸 将人

※1：男女共同参画白書における定義から、共働き世帯とは「夫婦共に非農林業雇用者の世帯」

※2：男女共同参画白書における定義から、専業主婦世帯とは「夫が非農林業雇用者で、妻が非就業者の世帯」

第 I 章



社会背景・調査概要

まず初めに、私たちが注目した、30歳前後の「夫婦のみの世帯」、「夫婦と子どもから成る世帯」をめぐり、持ち家取得の比率増加や、共働き世帯の上昇を見ていきます。

持ち家取得時の世帯主の年齢は、若年化しています。
また、共働きの世帯の占める割合は全体でも高まっていますが、若い世代ほど、その伸びは顕著になっています。

社会全体でも、妊娠・出産を経た後の就業継続が最新の調査で初めて50%を超えており、夫婦で働き続ける背景が変化してきています。

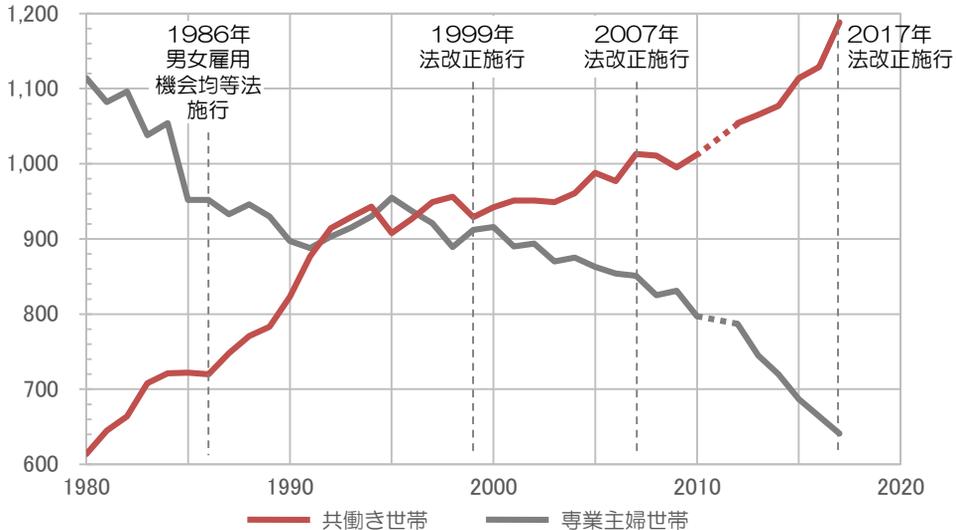
ここでは、こうした30歳前後の共働き世帯＝「30-0 DEWKS」に着目するに至った経緯を、ご紹介します。

1 増加が加速する共働き世帯

1-1. 共働き世帯数の推移

共働き世帯数は、1980年代から一貫して増加しており、1990年代後半に専業主婦世帯を上回りました。さらに2007年には、「男女雇用機会均等法」の改正により、企業に対し、妊娠・出産で休業することを理由に就業に不利な処遇をすることを明確に禁止することを定めた条項が追加されるなどの法の整備が進み、2009年から共働き世帯の増加傾向はさらに加速しています。

■ 共働き世帯数の推移



出典：総務省統計局 1980年～2017年 労働力調査より作成

※男女共同参画白書における定義から、「共働き世帯」とは、夫婦共に非農林業雇用者（非正規の職員・従業員を含む）の世帯。同じく、「専業主婦世帯」とは、夫が非農林業雇用者で、妻が非就業者（非労働力人口及び完全失業者）の世帯。
 ※2010年及び2011年の値（点線表示）は、岩手県、宮城県、及び福島県を除く全国の結果。

■ 男女雇用機会均等法の変遷

| | 1986年施行 | 1999年法改正施行 | 2007年法改正施行 | 2017年法改正施行 |
|--------------|--|--------------------------------------|--|--|
| 性差別の禁止 | 募集・採用 配置・昇進 定年・解雇 降格・職種の変更・雇用形態の変更・退職勧奨・労働契約の更新 | 努力義務 努力義務（女性） 努力義務（女性） 規定なし | 禁止 禁止（女性） 禁止（女性） 規定なし | 禁止 禁止（男女） 禁止（男女） 禁止（男女） |
| 妊娠等による不利益取扱い | 妊娠・出産・産休取得による解雇を禁止 | 妊娠・出産・産休取得による解雇を禁止 | 妊娠・出産・産休取得その他の理由による解雇その他不利益取扱いを禁止 妊娠中・産後1年以内の解雇は事業主の反証がない限り無効 | 妊娠・出産・産休取得その他の理由による解雇その他不利益取扱いを禁止 妊娠中・産後2年以内の解雇は事業主の反証がない限り無効 上司・同僚が職場において、妊娠・出産・育児休業などを理由とする就業環境を害する行為をすることがないよう防止措置義務 派遣労働者の派遣先に、妊娠・出産・育児休業などを理由とする就業環境を害する行為をすることがないよう防止措置義務 |
| 制裁 | 規定なし | 企業名の公表 | 企業名の公表（対象の拡大） 報告徴収に応じない場合の過料 | 企業名の公表 報告徴収に応じない場合の過料 |
| 施行期日 | S61.4.1 | H11.4.1 (母性健康管理のみH10.4.1) | H19.4.1 | H29.1.1 |

出典：厚生労働省「男女雇用機会均等法の変遷」及び「男女雇用機会均等法のあらまし」（平成30年5月）より作成

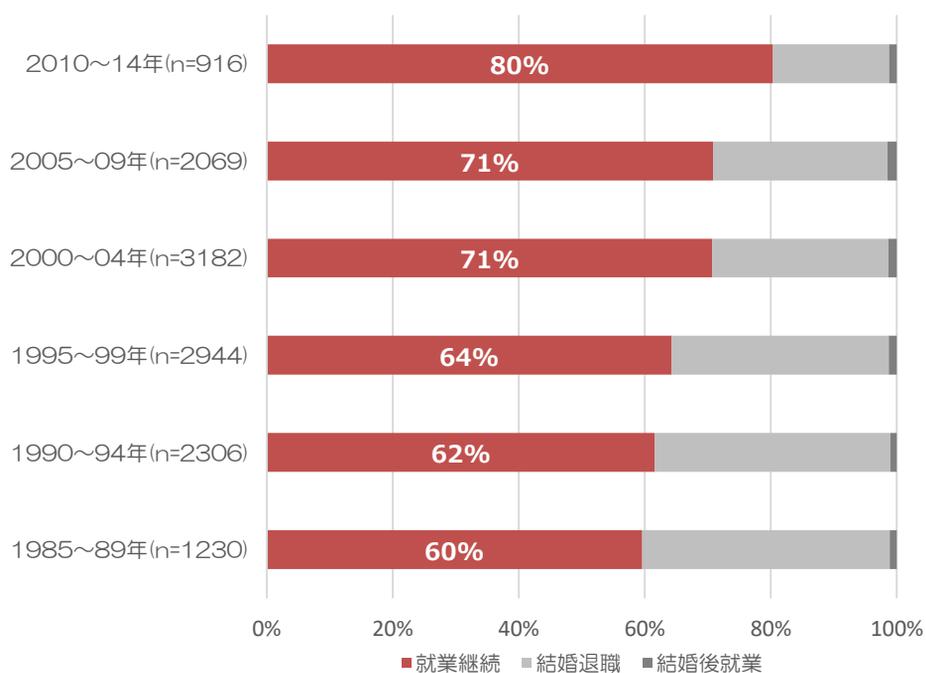
1-2. 結婚・妊娠・出産後も復職して働き続けることが浸透

結婚後は8割が就業継続

ここでは、国立社会保障・人口問題研究所の「第15回出生動向基本調査」を基に、結婚前後での就業継続の状況を確認します。

1985年～1989年において就業継続の割合は60%でしたが、2000～2004年には71%に達し、2010年～2014年においては、80%となっています。

■ 結婚年別にみた、結婚前後の妻の就業変化



出典：国立社会保障・人口問題研究所 第15回 出生動向調査

1 増加が加速する共働き世帯

1-2. 結婚・妊娠・出産後も復職して働き続けることが浸透 続き

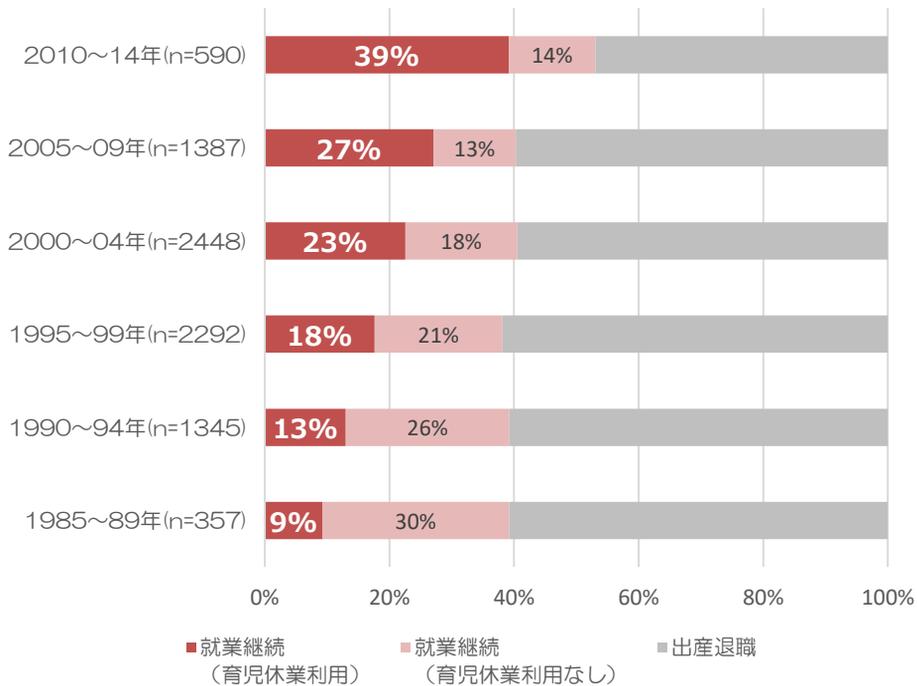
出産後の就業継続が初めて過半数を超える

次に、妊娠・出産を経て、女性の就業がどのように変化するか、年代毎の推移を見ていきます。

1985年～2009年まで出産を経て就業を継続する比率は40%前後で推移しており、大きな増減はありません。しかし、就業継続の内訳を見ると、育児休業の利用が、9%から27%に増加しています。こうした変化のなか、2010～2014年においては就業継続の割合が53%となり、初めて過半数を超えました。

社会全体を見渡すと出産後も働き続けることには多くの課題があるものの、妊娠・出産後も、働き続けるのが一般化しつつあるのではないのでしょうか。

■ 第1子出生年別に見た、第1子出産前後の妻の就業変化



出典：国立社会保障・人口問題研究所 第15回 出生動向調査

また、第一子の出産年齢は、2016年の人口動態調査（厚生労働省）によると30.7歳となっており、30歳前後で第一子を出産し、就業を継続している人が増えていると言えます。

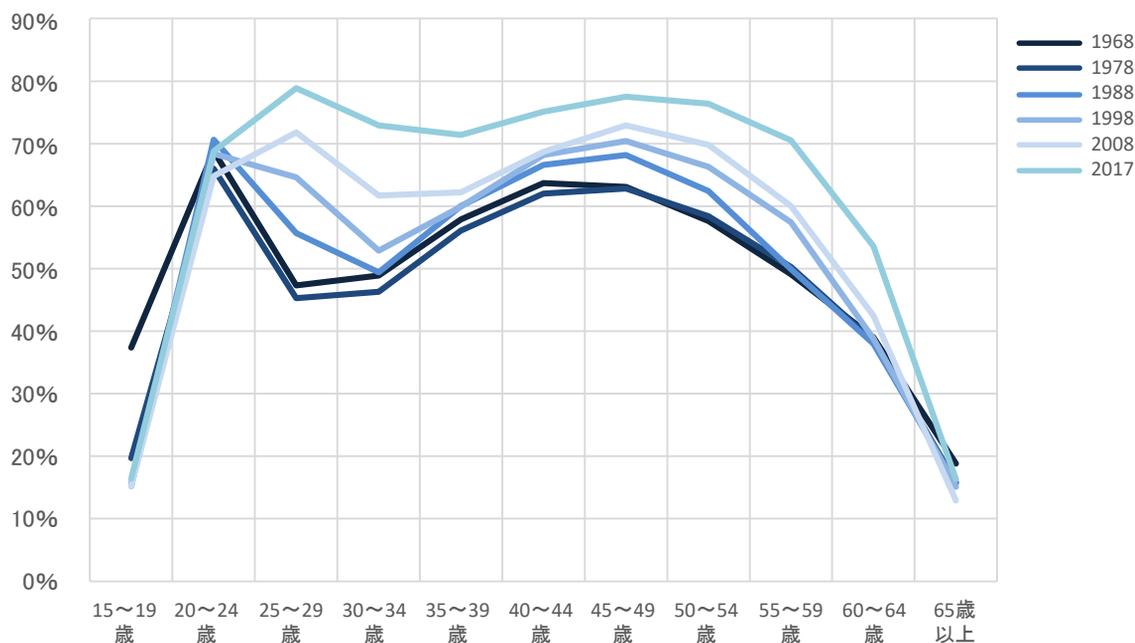
1-2. 結婚・妊娠・出産後も復職して働き続けることが浸透 続き

25～34歳の第一子出産前後の女性の労働力率が一貫して増加

ここまで見てきたように、共働き世帯の増加理由として、結婚・妊娠・出産を経て就業継続することが一般化したことが挙げられます。

総務省統計局の労働力調査を確認すると、第一子出産年齢前後の女性の労働力率は増え続けており、このことから、結婚・妊娠・出産を経た女性が働き続けることが一般化していると言えます。

■ 年齢階級別 女性の労働力率



※1968-1973年は、沖縄県分は含まれていない。沖縄の本土復帰により、1972年7月以降、沖縄県も調査の範囲に含まれた。

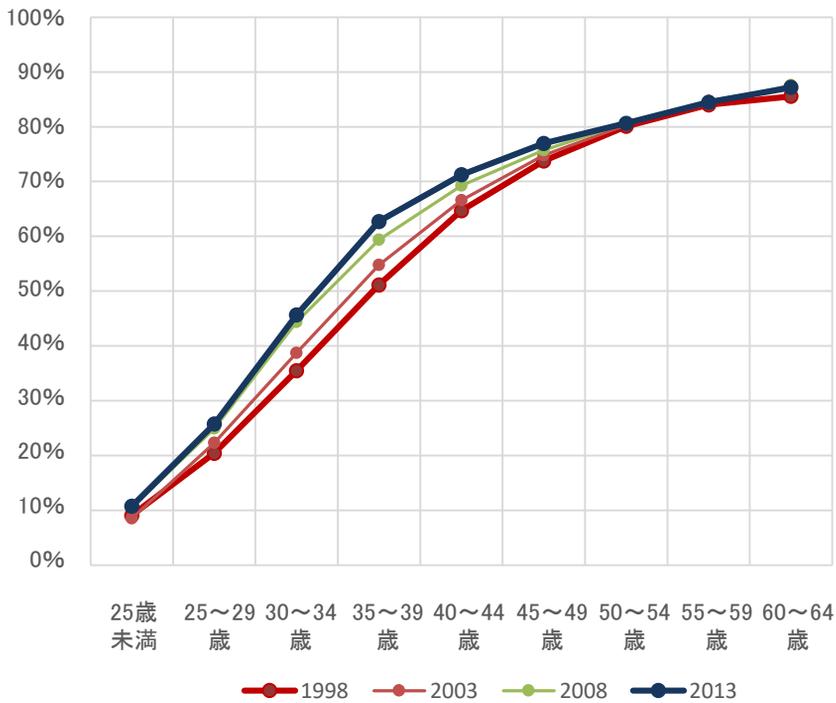
出典：平成29年 総務省統計局 労働力調査より作成

2 30歳前後で家建てる世帯の比率が増加中

2-1. 上昇する持ち家率の変化に着目 ―持ち家取得の若年化の傾向―

住宅・土地統計調査で1998年～2013年の変化を確認すると、「夫婦と子どもから成る世帯」の持ち家率は、30代で大幅に上昇していることがわかります。

■ 持家率（夫婦と子の世帯）



出典：平成10年～平成25年 総務省統計局 住宅・土地統計調査より作成

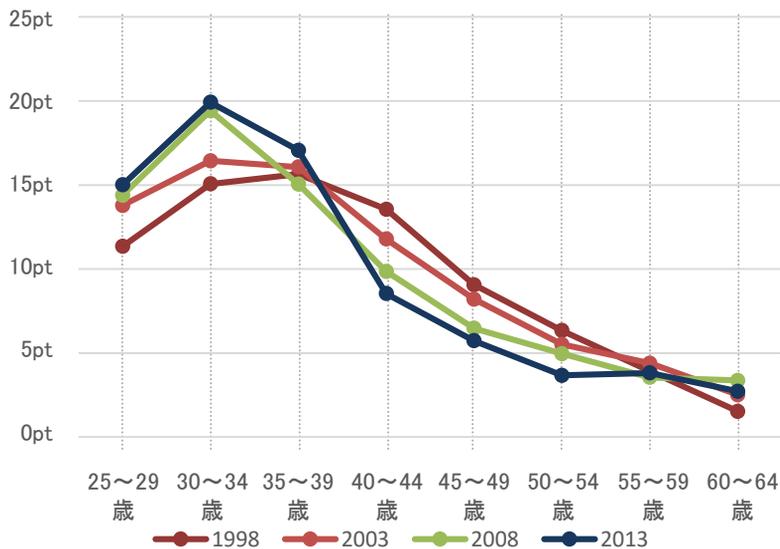
2-1. 上昇する持ち家率の変化に着目 ―持ち家取得の若年化の傾向― 続き

ここで、先に見た30代を中心とした年代の持ち家率の上昇を、5歳下の持ち家率との差で確認します。持ち家率の上昇巾をその期間での「住宅の取得」の指標と捉えれば、持ち家率の5歳下との差が大きいほど、そのタイミングで持ち家を取得している人が多いと考えることができます。

図をみると、1998年から2013年の期間で、25～29歳及び30～34歳で持ち家率の5歳下との差が大きくなっており、40代以上の年代で持ち家率の5歳下との差が小さくなっていることがわかります。

このことより、社会全体の動きとして、持ち家の取得が若年化していることがわかります。

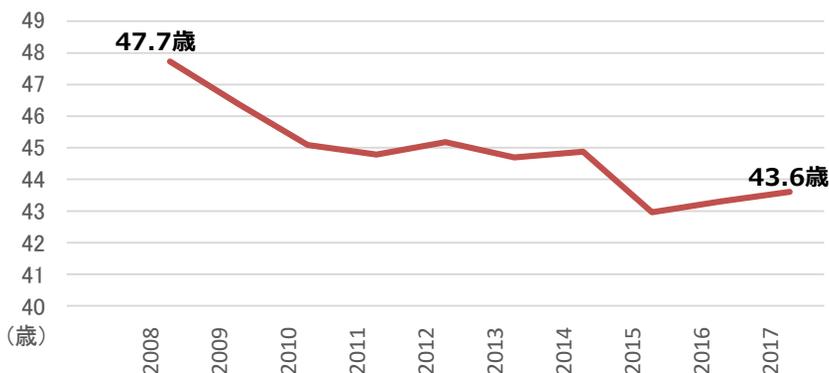
■ 持家率の5歳下からの差（夫婦と子の世帯）



出典：平成10年～平成25年 総務省統計局 住宅・土地統計調査より作成

また、上記の動きを、2017（平成29）年 住宅市場動向調査における「戸建注文住宅の着工時の世帯主の平均年齢」で確認してみると、2008年の47.7歳から、2017年の43.6歳まで、低下傾向があり、異なる統計データが、持ち家取得の若年化という類似する傾向を示しています。

■ 住宅着工時の世帯主の平均年齢



出典：平成20年～平成29年 国土交通省 住宅市場動向調査より作成

ここまで見てきた通り、30歳前後での夫婦と子の世帯の持ち家率が上昇しています。第一子の出産年齢が30歳前後であることを踏まえると、妊娠・出産と同時期に、持ち家を取得している人が増えていると考えられます。

2 30歳前後で家を作る世帯の比率が増加中

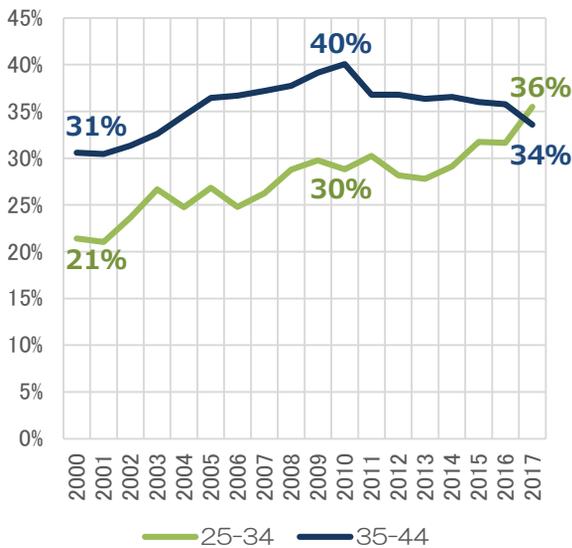
2-2. 住宅業界では25～34歳世帯の住宅着工比率の上昇が顕著

ここまでの社会背景を踏まえ、住宅業界の状況を確認します。

住宅生産団体連合会の「戸建注文住宅の顧客実態調査」の顧客の年代ごとの比率では、2000年～2010年までは25～34歳の世帯も35～44歳の世帯も一貫して増加傾向にあります。しかし、25～34歳ではその後も増加を続けますが、35～44歳では2010年を境に減少に転じます。

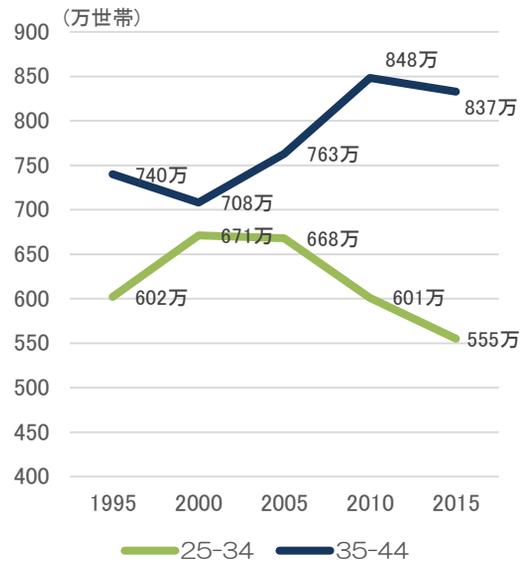
一方、2015（平成27）年 国勢調査の、「夫婦のみの世帯」と「夫婦と子どもから成る世帯」では、25～34歳の世帯数は、少子化の影響で2000年から減少に転じており、2015年まで一貫して減少しています。また、35～44歳の世帯数は、団塊ジュニア（36～39歳）の影響で2010年までは増加しており、2010年を境に減少に転じています。

■ 世帯主年齢の構成比



出典：住宅生産団体連合会 2000～2017年
「戸建注文住宅の顧客実態調査」より作成

■ 世帯数推移(夫婦のみの世帯、夫婦と子どもから成る世帯)



出典：平成7年～平成27年 国勢調査より作成

35～44歳の世帯は、世帯数の増減に符合する形で、住宅着工数も変動していると捉えることができます。

一方で、25～34歳の世帯では、世帯数は2000年から減り続けているにもかかわらず、住宅着工数に占める比率は増加し続けており、注目されます。

3 第一子出産前後での「女性の働き方モデル」と「居住モデル」の変化

3-1. 「女性の働き方モデル」と「居住モデル」は変化している

ここまで見てきたことを踏まえ、女性の働き方と、持ち家取得について、私たちの認識を2つのモデルに整理します。1つは、第一子出産前後での「女性の働き方モデル」であり、もう1つは、「居住モデル」です。

私たちは、この2つのモデルが、変化しているのではないかと、という問題意識を持っています。

「女性の働き方モデル」の変化とは、第一子出産前後の就業継続の一般化です。

「居住モデル」の変化とは、第一子出産前後で持ち家を取得する居住形態の台頭です。

以下に、各モデルの図と共に確認していきます。

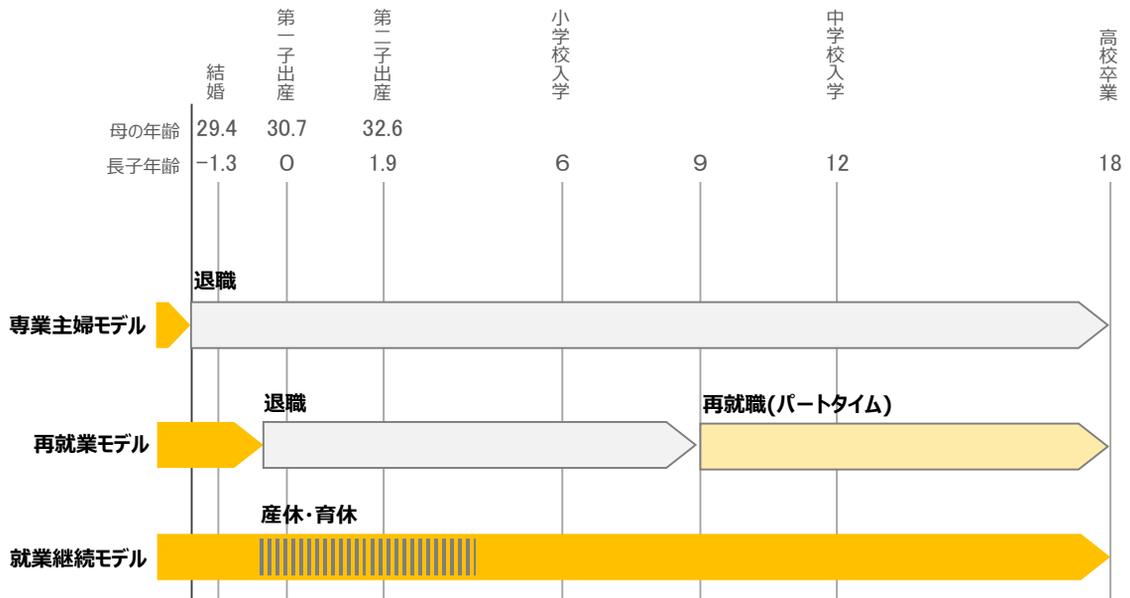
① 「女性の働き方モデル」の変化

近年一般化しているのは、結婚・妊娠・出産を経ての就業継続です。産休・育休を取得し、育休が明けたら職場復帰することで、持続的に働くモデルと言えます。

2000年代の主流であった、第一子出産のタイミングで一度退職し、子育てがひと段落してから再就職する「再就業モデル」や、女性が結婚前に退職し、専業主婦となることが一般的であった1980年代の「専業主婦モデル」とは、働き方が異なります。

出産後の就業継続が過半となったことや、第1子の出産年齢前後の年代の女性の労働力率の低下が鈍化していることから変化を捉えています。

■ 女性の働き方モデル



※結婚、第一子出産及び第二子出産時の母の年齢については、平成29年 厚生労働省 人口動態調査より作成

3 第一子出産前後での「女性の働き方モデル」と「居住モデル」の変化

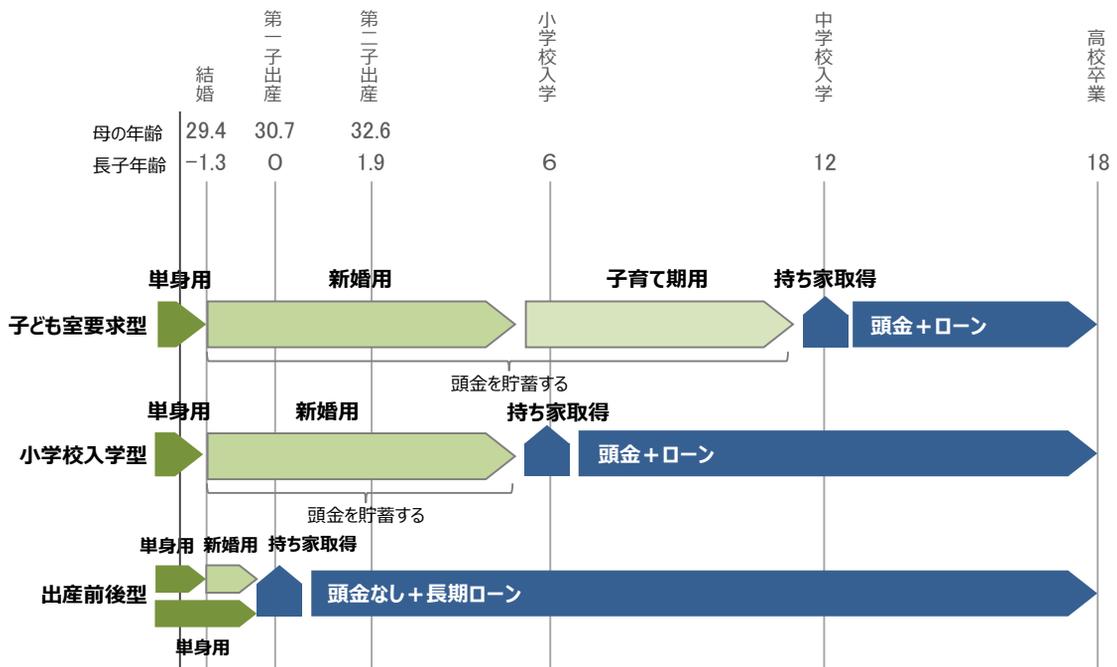
3-1. 「女性の働き方モデル」と「居住モデル」は変化している 続き

② 「居住モデル」の変化

近年台頭しているのは、第一子出産前後の年齢で持ち家を取得する世帯です。育児が始まる前後で持ち家を取得し、生活基盤を安定させるモデルと言えます。持ち家を取得するタイミングが早いため、長期固定の住宅ローンを組む点が特徴と捉えています。

従来認識されてきたのは、小学校入学前後に地域への定住ニーズが高まり、持ち家を取得する「小学校入学型」や、中学校入学後に子どものための子ども室が必要となることがきっかけで持ち家を取得する「子ども室要求型」です。いずれのモデルも、賃貸に居住する期間に住宅取得資金を貯蓄し、頭金としている点が特徴と捉えています。

■ 居住モデル



※結婚、第一子出産及び第二子出産時の母の年齢については、平成29年 厚生労働省 人口動態調査より作成

③ 第一子の出産前後での就業継続と持ち家取得

第一子出産前後で就業継続することが一般化し、第一子出産年齢の前後で持ち家を取得する世帯の比率が増加しています。

世帯数が減少を続けるこの年代において、こうした変化は注目されます。

私たちは、第一子出産前後の「女性の働き方モデル」と「居住モデル」が変化しているという仮説のもと、研究を開始しました。

調査概要

4

30-0 DEWKSの家づくりの背景や生活意識を調査

4-1. 30歳前後の共働き世帯=30-0 DEWKSに着目

ここまで、共働き世帯が増加していることや、第一子出産前後での就業継続が一般化していること、25～34歳の年代で持ち家取得及び住宅着工に占める比率が増えていることを見てきました。

25～34歳世帯に、いったい何が起きているのでしょうか。

私たちは、こうした共働き世帯や住宅着工などの動きから、第一子出産前後での「女性の働き方モデル」や「居住モデル」が変化していると捉え、25～34歳の年代には他の年代とは異なった生活背景や価値観があるのではないかと考えました。

私たちは、30歳前後で、共働き世帯が多く、育児が始まる前後のライフステージの方が多いことを捉え、この方々を「30-0 DEWKS」と名付け、調査・研究をスタートしました。

■「30-0 DEWKS」

- ・25歳～34歳で注文住宅を建てた
- ・子どもがいない、もしくは妊娠中、0～2歳以下
- ・夫婦のみ、もしくは夫婦と子の世帯
- ・夫婦共働き（フルタイム、パートタイム）



おとな30歳前後

30 - 0

子どもがいない
もしくは妊娠中、0～2歳

4-2. 調査目的

①30-0 DEWKSの家づくりの背景と生活意識

25歳～34歳の、第一子出産前後に持ち家を取得する共働き世帯に着目し、持ち家取得についての意識や、日常生活の意識を明らかにする。

②40-6 DEWKSとの比較

35歳～44歳の、子どもが小学生に上がる前後で持ち家を取得する共働き世帯に着目し、持ち家取得についての意識や、日常生活の意識を明らかにする。そして、30-0 DEWKSとの年代間の意識の違いを明らかにする。

また、2014年に発表した「いまどき30代夫の家事参加の実態と意識」で取り上げた人に近い世代の意識を再確認し、30-0 DEWKSの意識との違いや置かれているライフステージの特徴を明らかにする。

③過去の30-0 DEWKSとの比較

10年前に30-0 DEWKSで持ち家を取得した人の意識や暮らしに着目し、10年間の生活を踏まえた日常生活の意識を明らかにする。

4 調査概要

4-3-0 DEWKSの家づくりの背景や生活意識を調査

4-3. 調査概要

以下の条件にて定量調査を行いました。

- 調査時期：2018年6月
- 調査方法：WEBアンケート調査
- 調査対象：2002年～2007年、2012年～2017年に建築請負契約を締結
契約時20歳代～40歳代の既婚男女
- 回収数：ヘーベルハウス居住者 327件（内訳 30-0：237件／40-6：55件／過去の30-0：35件）
一般モニター 105件（内訳 40-6：105件）

4-4. 分析対象

下記項目で分析対象を定義し、比較します。

※本調査における「共働き」とは、「夫就業+妻就業」を指します。男女共同参画白書と異なるのは、「共働き」を妻の就業形態で判断し、夫を雇用者に限定しない点です。そのため、本調査における「共働き」には農林業雇用者も含まれますが、ヘーベルハウス建設エリアは21都府県となっているため、この影響は少ないと考えられます。なお、女性の就業は、正社員・契約社員などのフルタイム勤務、パート・アルバイトなどの就業形態を指し、産休・育休中の方を含みます。

※DEWKSとはdouble employed with kidsの頭文字をとった略称であり、子どものいる共働き世帯を指します。本調査では、子どものいない夫婦も含めてDEWKSと表現していますが、30-0 DEWKSについては、子ども部屋を2つ用意するなど、将来的に子どもが生まれることを想定した家づくりを行う方が多いことから、DEWKSとして扱っています。

①30-0 DEWKS (n=184/男性124・女性60)

- ・ 2013年～2017年に建築請負契約
- ・ 契約時 25歳～34歳
- ・ 契約時 子どもがいない、もしくは妊娠中、0～2歳以下
- ・ 契約時、アンケート回答時いずれも夫婦のみ、もしくは夫婦と子の世帯
- ・ 契約時 共働き



②40-6 DEWKS (n=64/男性42・女性22)

- ・ 2012年～2017年に建築請負契約
- ・ 契約時 35歳～44歳
- ・ 契約時 子ども小学校入学前後、5歳～8歳
- ・ 契約時、アンケート回答時いずれも夫婦のみ、もしくは夫婦と子の世帯
- ・ 契約時 共働き



※40-6 DEWKSには子どものいない回答者は含まれません。

③過去の30-0 DEWKS (n=26/男性20・女性6)

- ・ 2002年～2007年に建築請負契約
- ・ 契約時 25歳～34歳
- ・ 契約時 子どもがいない、もしくは妊娠中、0～2歳以下
- ・ 契約時、アンケート回答時いずれも夫婦のみ、もしくは夫婦と子の世帯
- ・ 契約時 共働き

※参考

旭化成ホームズ共働き家族研究所 2012～2014年「子育て期共働き家族・専業主婦家族 調査」
過去に行った上記調査は、調査対象が現在の40-6 DEWKSと近い属性であることから、参照していきます。

5 30-0 DEWKSとはどんな人？

5-1. 30-0 DEWKSの基本的な特徴

ここでは、30-0 DEWKSの基本的な特徴を見ていきます。

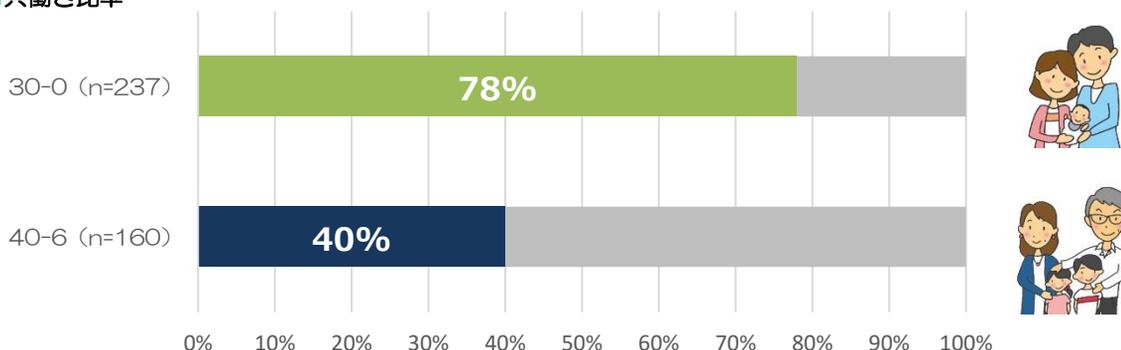
調査対象者の共働き率、女性の転職経験、子どもの年齢分布、夫婦の収入比率など、代表的な項目について、40-6 DEWKSと対比的に見ることができます。

①約8割が共働き

30-0の78%が家を建てるときに共働きです。40-6では40%と低くなっています。30-0において共働き率が高くなっているのは、後述の通り子どものいない夫婦が多く、就業を継続するか判断するライフステージにないことが考えられます。

一方、40-6で共働き率が低いのは、調査の条件として、小学校に上がる前後の子どものいる世帯のため、保育園から小学校への進学時に一時的に就業していない人が多いことが考えられます。

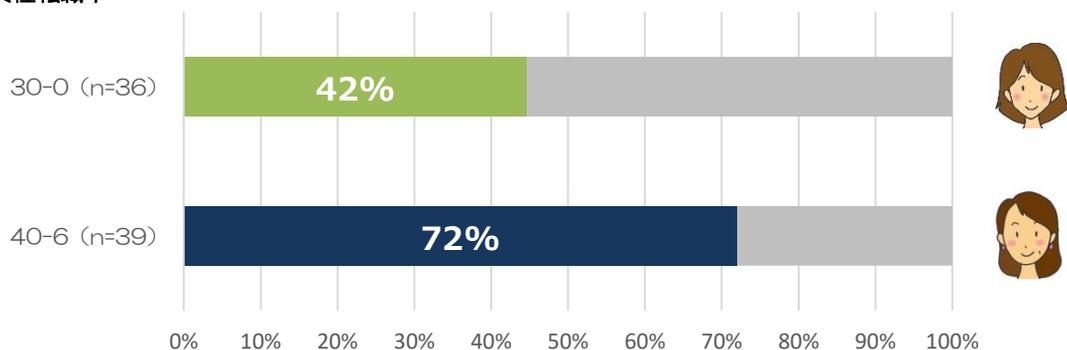
■ 共働き比率



②女性の転職経験が約4割

30-0 DEWKS女性の42%が転職を経験しています。40-6 DEWKS女性の転職率が72%と高くなっているのは、社会人としての経験が長いことに加え、結婚・妊娠・出産で一旦退職し、社会復帰をする際に転職しているケースが多いと推測されます。子どもの成長ステージが異なるため、単純な比較はできませんが、30-0 DEWKS女性の転職の少なさと対照的になっています。

■ 女性転職率



5 30-0 DEWKSとはどんな人？

5-1. 30-0 DEWKSの基本的な特徴 続き

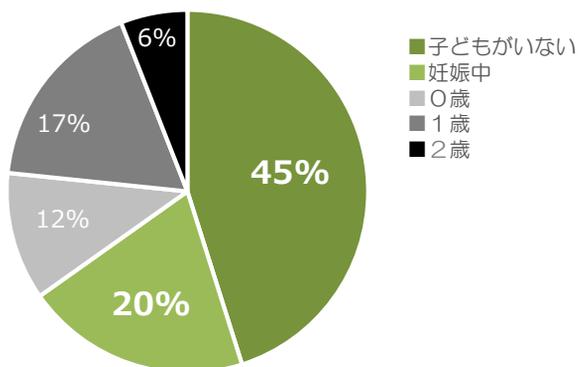
③約7割が子がない、もしくは妻が妊娠中

30-0 DEWKSの約7割が、家を作る時に子がない、もしくは妻が妊娠中です。

※調査対象者は契約時子どもがいない、もしくは妊娠中、0～2歳以下

※本調査では、子どものいない夫婦も含めてDEWKSと表現していますが、30-0 DEWKSについては、子ども部屋を2つ用意するなど、将来的に子どもが生まれることを想定した家づくりを行う方が多いことから、DEWKSとして扱っています。

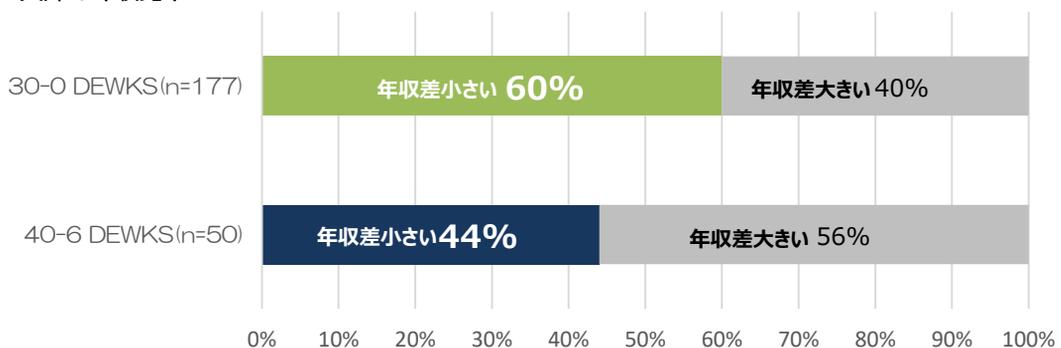
■子供の有無（30-0）



④6割が夫婦の年収はほぼ同等

30-0 DEWKSの6割が夫婦の年収がほぼ同等です。

■夫婦の年収比率



※年収の差が小さいとは、夫と妻の収入比率が概ね 4：6 ～ 6：4 と回答された場合を指し、その他を年収の差が大きいとしています。

ここまで見てきたのは、30-0 DEWKSの基本的な特徴です。

次章では、30-0 DEWKSが家を作る意識について見ていきましょう。



なぜ、30-0のタイミングで家を建てるのか？

第Ⅱ章では、30-0 DEWKSが家を建てる背景を確認していきます。

30-0 DEWKSは、家を建てるという重大な決断を、どのようなきっかけで行ったのでしょうか。また、社会的な経験の少ない年齢で家を建てる上で、どのような情報収集を行ったのでしょうか。全体を通じて見えてきたことは、家を建てる上で長期的な視点で人生について考え、家づくりそのものだけでなく、くらしの全方位で全体最適を図る30-0 DEWKSの意識です。

私たちは、30-0 DEWKSの分析を通じて、3つのことを発見しました。

1つは、30-0 DEWKSは「将来を考え始めた」ことを起点に家づくりが始まり、家づくりを通じて人生を「全体最適化」する意識が高いことです。

2つ目は、30-0 DEWKSが「早期建築・長期居住」の価値観を持っていることです。今建てることに、ライフプラン上の大きいメリットを捉えており、建てた家には老後まで住み続けたい、という価値観です。

3つ目は、30-0 DEWKSには「共働きで支え合う生活設計」があり、生活意識の全般に渡り、「夫婦で協力していく意識」が高いことです。そうした意識によって、共働きを続けていく困難さが和らいでいる可能性を見出しました。

家を建てる背景に「長期の将来計画」がある

1

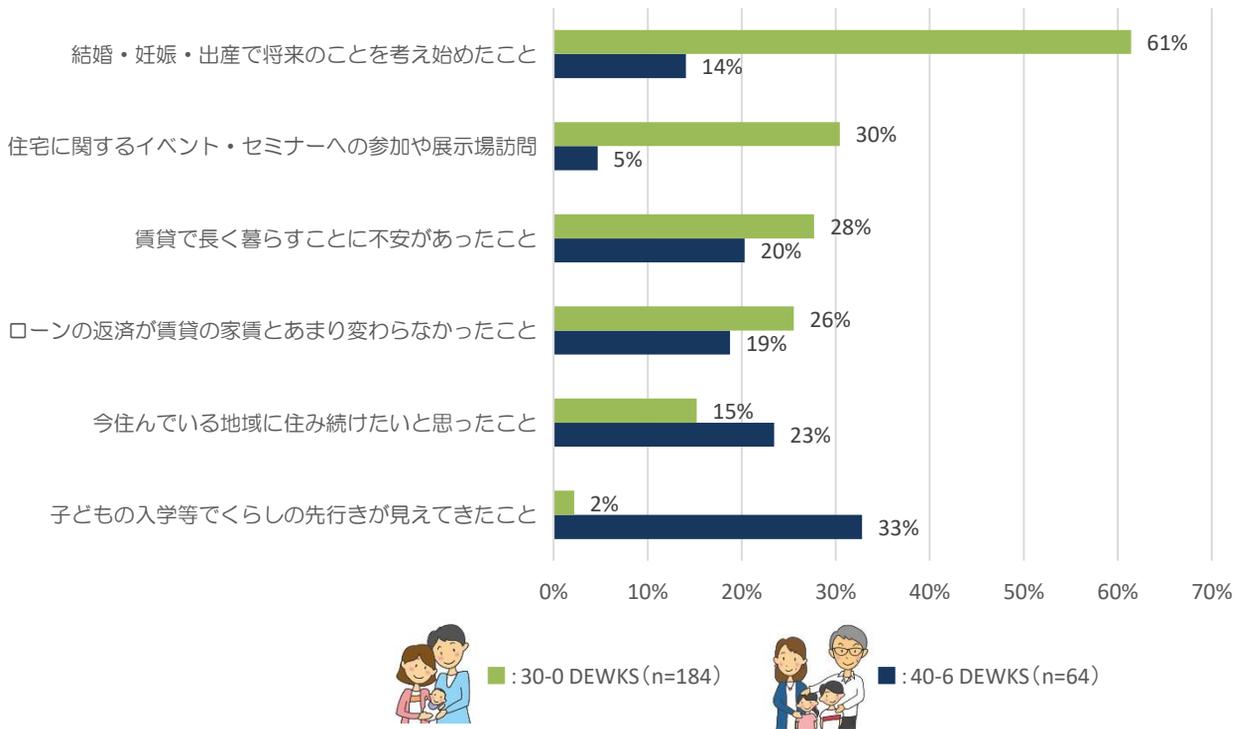
将来を見越し、「人生の全体最適化」を目指している

1-1. 「将来のことを考え始めた」ことを起点に家づくりが始まる30-0 DEWKSと、「将来の見通しが立った」ことを起点に家づくりが始まる40-6 DEWKS

30-0 DEWKSは、家を建てるという重大な決断を、どのようなきっかけで行っているのでしょうか。アンケート結果からは、多くの方が「結婚・妊娠・出産で将来のことを考え始めた」からとしています。

一方、40歳前後、子どもが小学生前後で建てられている方の建築のきっかけを見てみると、下図のように、「子どもの入学等で暮らしの先行きが見えてきたこと」が最も多くなっており、ライフステージの違いによって家を建てるきっかけは違うことが見て取れます。

■ 建築のきっかけ



1-1. 「将来のことを考え始めた」ことを起点に家づくりが始まる30-0 DEWKSと、 「将来の見通しが立った」ことを起点に家づくりが始まる40-6 DEWKS 続き

30-0 DEWKSの声を確認してみると、以下のようなものがあります。



子供もまだおらず将来にかかるお金が不明確な中ではあるが、早めに建てたことで家にかかるお金は明確になっており、将来の設計もしやすいと思う。



生活していくうえで、今、なんとかできることと、考えても何ともできないことを分けて考えた。何とかできるところは解決していこうとした。そのひとつが、家を建てるということだった。保育園などの生活条件は応募しないとわからないので当時は何ともできなかった。



家を建てる時期が早ければ子育てがあり、遅ければ親の介護があったりして、ライフスタイルは常に変わりやすい。100%の家づくりを求めるより、家を持って何をしたいのか明確に決めて欲しい時に買えばいいと思う。



子どもが小さく、生活のイメージが無いが、プロにお任せした。わからないことを考えても仕方ない、不安がっても仕方ない。

30-0 DEWKSは、「合理的な将来設計」の一環として家を建てている、ということが浮かび上がります。不明確でわからないことが多い状況にあっても、「人生の全体最適化」を目指し、「今、決められることを決めている」と言えます。

置かれているライフステージの違いから、将来の見通しが立ってから家を建てる40-6 DEWKSとは家を建てる起点が異なります。

家を建てる背景に「長期の将来計画」がある

1 将来を見越し、「人生の全体最適化」を目指している

1-2. 住空間だけでなく、人生を「全体最適化」するアドバイスニーズがある。

長期の将来計画を見越し家を建てることを決断した30-0 DEWKSは、住宅を建てるにあたってどのような情報を、求めているのでしょうか。

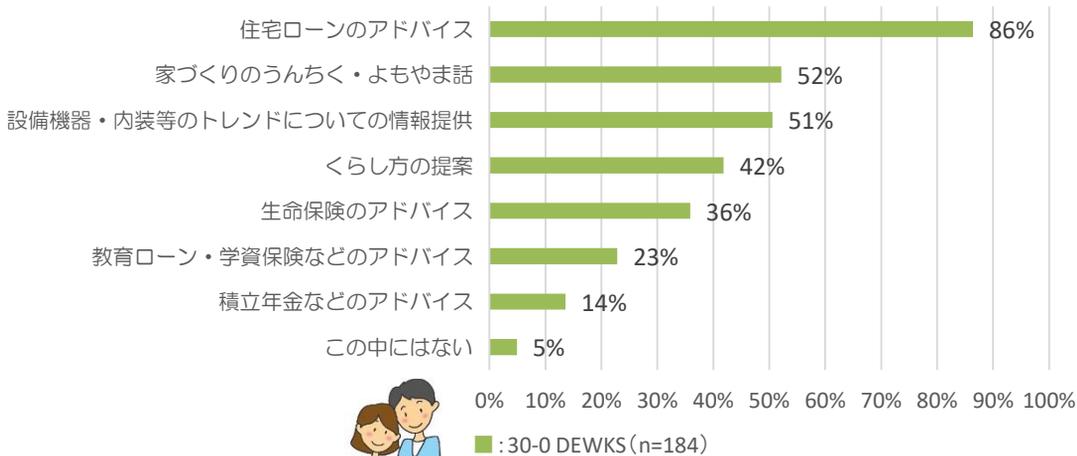
30-0 DEWKSが求めているアドバイスを確認すると、住空間のみでなく、自分たちの人生設計全体の中で家づくりを位置づけ、人生の「**全体最適化**」を図っていると考えられます。それは、家づくりに必要な基本的なアドバイスだけでなく、家づくりとは一見関係のないものにまで、アドバイスを求めているためです。

アンケート結果によると、最も多いのは「住宅ローンのアドバイス」となっており、86%を占めています。上位には「家づくりのうんちく・よもやま話」（52%）、「設備機器・内装等のトレンドについての情報提供」（51%）、「くらし方の提案」（42%）と家づくりに関するニーズが続きます。

ここまでは、納得のいく家を建てるためには最低限必要な知見であり、ニーズが高いのもうなずけます。

一方、注目されるのは「生命保険のアドバイス」を求めた人が36%存在する事実です。また「教育ローン・学資保険などのアドバイス」（23%）、「積立年金などのアドバイス」（14%）についても一定のニーズがあり、住宅ローンのみでなく、人生設計を進める上で重要な資金計画全般に対して、情報提供やアドバイスが求められています。

■家づくりの際に求めるアドバイス



一見、家を建てることとは関連の薄い情報についても、30-0 DEWKSは将来計画を考える上で必要な情報と捉えており、ニーズがあることが明らかになりました。

30-0 DEWKSが求めているアドバイスは、住空間のみでなく、自分たちの人生設計全体の中で家づくりを位置づけています。このことより、家を建てる＝家づくり、よりも、家を建てることをきっかけに、将来の生活に見通しをつけ、安心感を得ようとしており、人生の「**全体最適化**」を図っていると考えられます。

2 「早期建築・長期居住」の価値観

2-1. 30-0 DEWKSを感じる「今、建てるメリット」は長期的な住宅コストの確定

30-0 DEWKSには早期に住宅コストを確定させるニーズがある

30-0 DEWKSは、現在のライフステージで住宅を建築することにどのようなメリットを感じているのでしょうか。

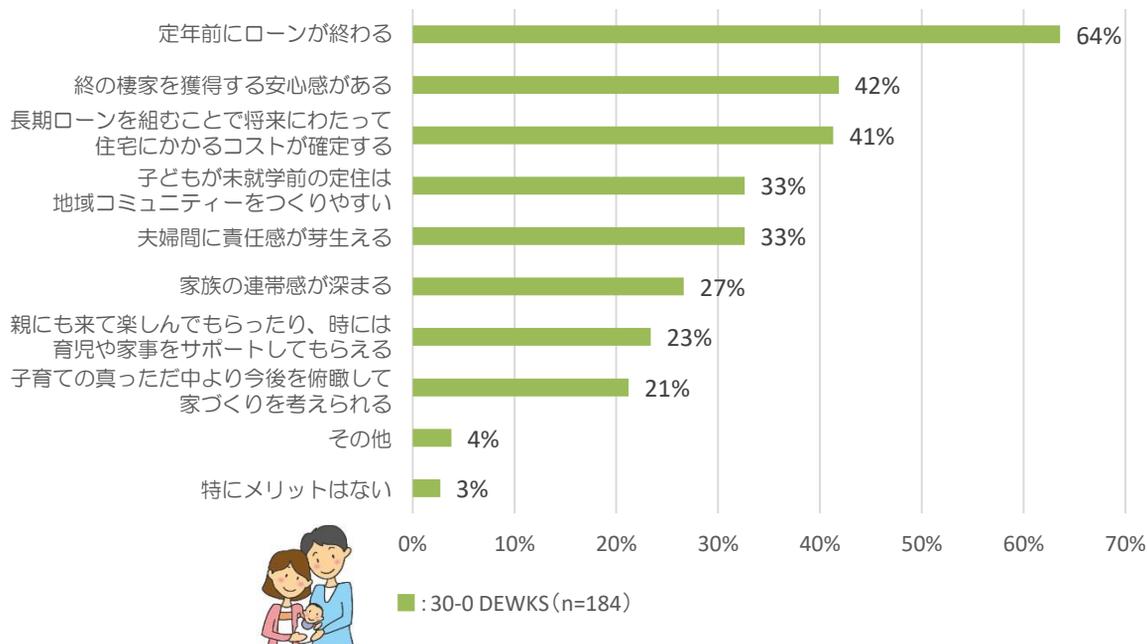
30-0 DEWKSの意識からは、「早期に住宅コストを確定させる」ということが、満足感の高い判断であったことが見えました。さらに、30-0 DEWKSの声を見ると、経済面だけでなく、家族の思い出などの情緒面でも、くらしの長期性を捉えていることがわかります。

先述の通り、30-0 DEWKSの家づくりの背景には将来計画があり、計画の中で家にかかるコストが明確になることにメリットを感じていると考えられます。

アンケートの回答では、「定年前にローンが終わる」が64%で最大となっています。また、「長期ローンを組むことで将来にわたって住宅にかかるコストが確定する」とする方も41%おり、資金計画の先行きに見通しが持てることをメリットに挙げています。長期の将来計画に関心が高い点は、「建築のきっかけ」で先に述べた傾向と同様であり、注目されます。

また、「終の棲家を獲得する安心感がある」や「子どもが就学前の定住は地域コミュニティをつくりやすい」といった、生活の安心感を得ることをメリットとする比率も高くなっています。

■早期建築のメリット（30-0）



2 「早期建築・長期居住」の価値観

2-1. 30-0 DEWKSを感じる「今、建てるメリット」は長期的な住宅コストの確定 続き

ここまで、アンケートの結果をご紹介してきましたが、ここで、実際に家を建てた30-0 DEWKSの代表的な声を紹介します。

■実際に家を建てた30-0 DEWKSの声（メリット）



子どもが小さいうちに建てたので、子どもの記憶に残る家になったと思う。



子どもの成長に合わせて生活スタイルも変わるが、家は変わらないので安定感がある。



定年後、住居費払わず住めること。



早めにローンを終わらせることにより、後半生活に余裕ができる。



自分の家で子育てをしたり、長く過ごすことができる。



子どもと家族の記憶が毎年増えていくのが楽しみ。子どもの成長や庭の木が大きくなること、これからの楽しみです。

また、10年前に家を建てた先輩30-0 DEWKSの声も紹介します。10年暮らしてみて、当時を振り返っていただいた声です。

■先輩はこう言った「10年前に家を建てた30-0 DEWKSの声」

人生の大半を自分たちに合った家で暮らせる



先輩30-0 DEWKS

子どもが生まれる前の夫婦として早い段階で人生設計をみつめる機会を得た。

こうした声を踏まえると、経済面での合理性と、家族の思い出などの情緒面で、くらしの長期性を捉えており、家を建てたことが満足感の高い判断であったことが伺えます。

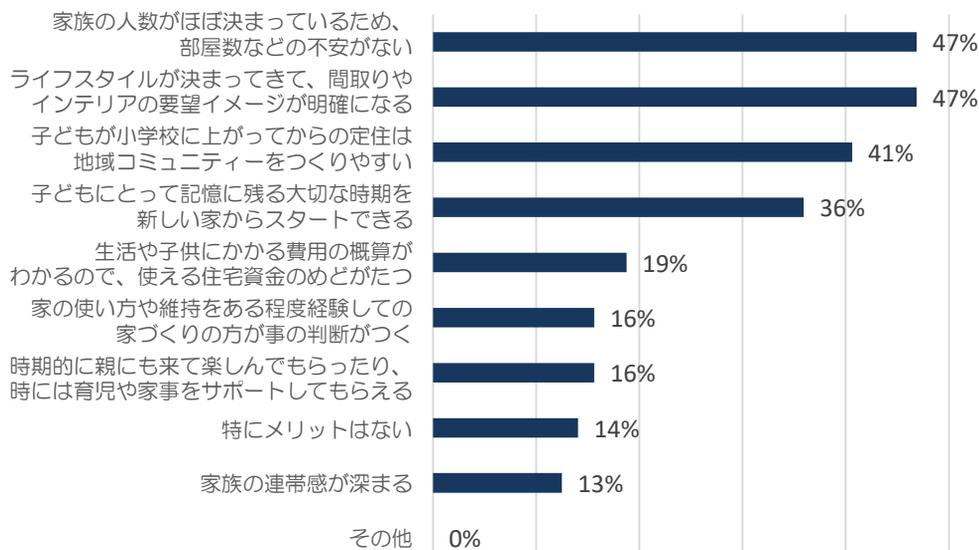
2-1. 30-0 DEWKSを感じる「今、建てるメリット」は長期的な住宅コストの確定 続き

40-6 DEWKSは「今の生活」にフィットした家づくり

一方、40-6 DEWKSでは、「家族の人数がほぼ決まっているため、部屋数などの不安がない」（47%）、「ライフスタイルが決まってきて、間取りやインテリアの要望イメージが明確になる」（47%）、「子どもが小学校に上がってからの定住は地域コミュニティーをつくりやすい」（41%）、など、現在の暮らしにフィットする家づくりができることをメリットに挙げており、自分のライフスタイルに合った「家づくり」そのものに、価値を感じているようです。

ここでも、30-0 DEWKSと置かれているライフステージが違うことによる、家づくりの時期についての認識の違いがあることがわかります。

■ 子どもが小学生前後で建てるメリット（40-6）



■ : 40-6 DEWKS (n=64)

2 「早期建築・長期居住」の価値観

2-2. 30-0 DEWKSが感じる「今、建てるデメリット」は「未確定」がキーワード

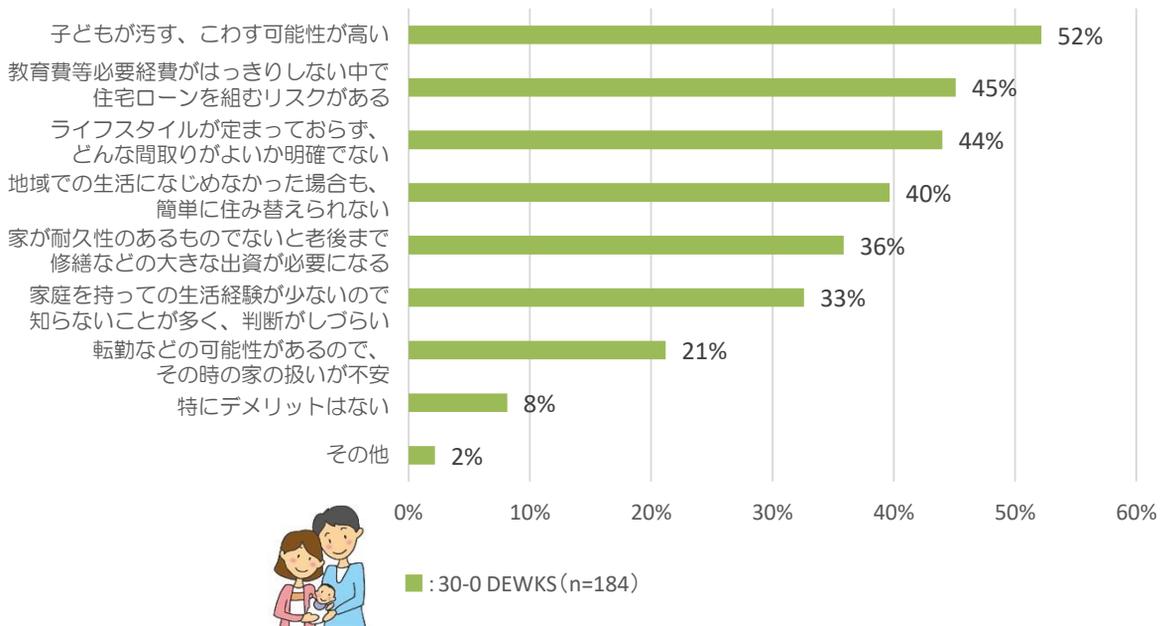
30-0 DEWKSは、現在のライフステージで家を建てることのデメリットについてはどのように考えているのでしょうか。

アンケートの結果からは、くらしに**未確定**な点が多い中で家を建てることにデメリットを感じている様子が伺えます。

未確定な点とは、自分たちのライフスタイルや子どもの教育など、想像はしているものの、まだ決まっていないことです。

アンケートの回答を見ると、デメリットとしては「子どもが汚す、こわす、可能性が高い」が52%と最も高くなっています。続いて、「教育費等必要経費がはっきりしない中で住宅ローンを組むリスクがある」（45%）、「ライフスタイルが定まっておらず、どんな間取りがよいか明確でない」（44%）、「地域での生活になじめなかった場合も、簡単に住み替えられない」（40%）、「家が耐久性のあるものでないと老後まで修繕などの大きな出資が必要になる」（40%）と続きます。

■ 早期建築のデメリット（30-0）



子どもが家を傷つけるということは、育児期において、どうしても起こってしまうことです。一方、先述の「メリット」で捉えた「子どもの記憶が毎年増えていくのが楽しみ」といった声は、こうした家の傷さえも思い出に変換していく可能性を持ったものであると考えられます。

また、自分たちのライフスタイルや子どもの教育に**未確定**な点を残している点が、先述の「将来設計を網羅するアドバイスニーズ」につながっていると考えることができ、自分たちが捉えているデメリットを最小化しようとしている姿勢が伺えます。

2-2. 30-0 DEWKSが感じる「今、建てるデメリット」は「未確定」がキーワード 続き

ここで、30-0 DEWKSのうち、子どもがいる人（妊娠中含む）と、子どもがいない人で意識の違いを確認してみると、異なる傾向があることがわかります。

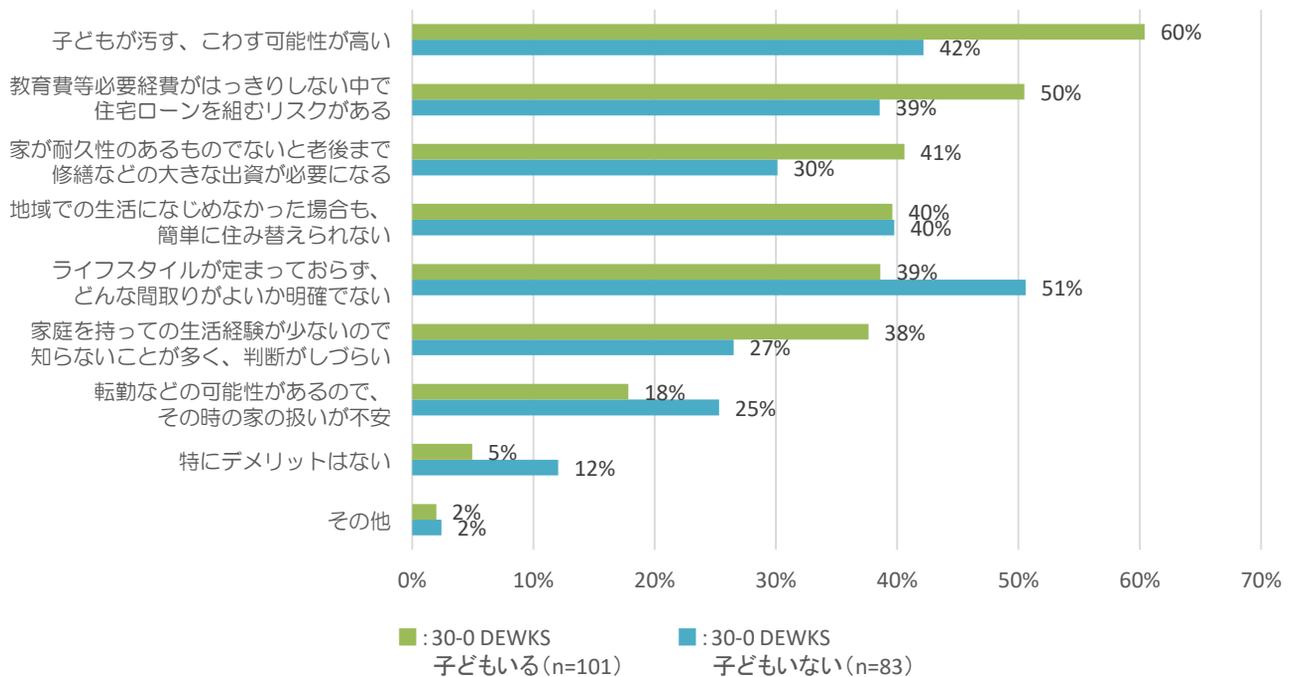
子どものいるグループ（n=101）では、子どもが家を傷つけることや、コスト面での心配の声があります。

「子どもが汚す、こわす、可能性が高い」ことをデメリットとする人が60%を占めます。続いて、「教育費等必要経費がはっきりしない中で住宅ローンを組むリスクがある」（50%）、「家が耐久性のあるものでないと老後まで修繕などの大きな出資が必要になる」（41%）の順で高い比率となっています。

子どものいないグループ（n=83）では自分たちにとってどのような家を建てるのがよいか、わかりにくいことがデメリットとして挙がっています。

「ライフスタイルが定まっておらず、どんな間取りがよいか明確でない」ことをデメリットとする人が51%を占め、最も多くなっています。

■早期建築のデメリット（30-0、契約時 子どもの有無の違い）



子どもとの生活経験の有無が家づくりに与える影響は大きいと言えます。

家を建てる時期に子どもがいるか、いないかの違いで、家を建てる時期についての意識に違いがあり、注目されます。

2 「早期建築・長期居住」の価値観

2-2. 30-0 DEWKSが感じる「今、建てるデメリット」は「未確定」がキーワード 続き

ここで、実際に家を建てた30-0 DEWKSの代表的な声を紹介します。

■実際に家を建てた30-0 DEWKSの声（デメリット）



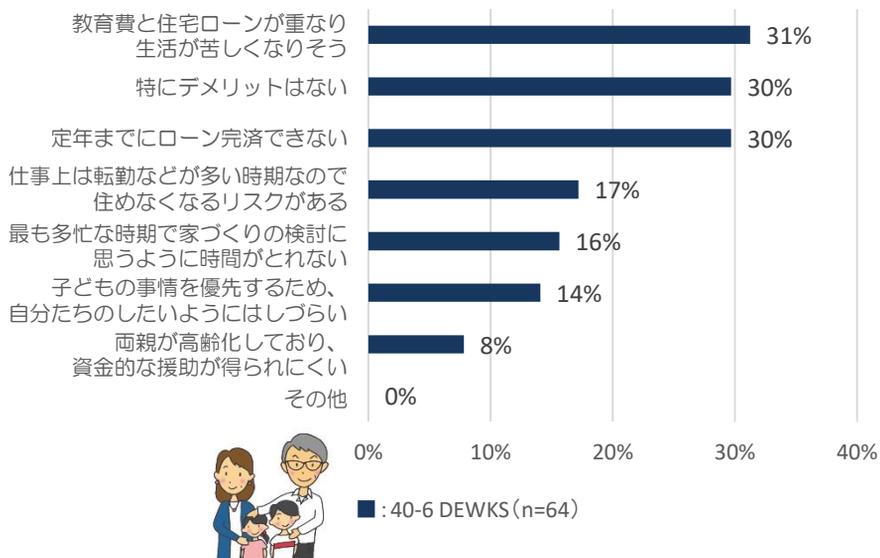
夫婦生活が浅い中で建てたため、このようにしておけばよかったかなと思う箇所が少しずつ出てきている。



家を建ててから子どもに恵まれたので、間取りなど想定外なこともあった。

一方、40-6 DEWKSでは、「教育費と住宅ローンが重なり生活が苦しくなりそう」が31%と最も高くなっています。「定年までにローン完済できない」（30%）が続きますが、同率で「特にデメリットはない」とされる方も30%おり、こうした方は、ライフプランを着実に実行されていると考えられます。

■子どもが小学生前後で建てるデメリット（40-6）



2-3. 「今は漠然としているが確実に来る将来」が不安 —30-0DEWKSの不安感を探る—

ここで、30-0 DEWKSが、先の人生を見渡してどのような不安意識を持っているのかを見ていきます。

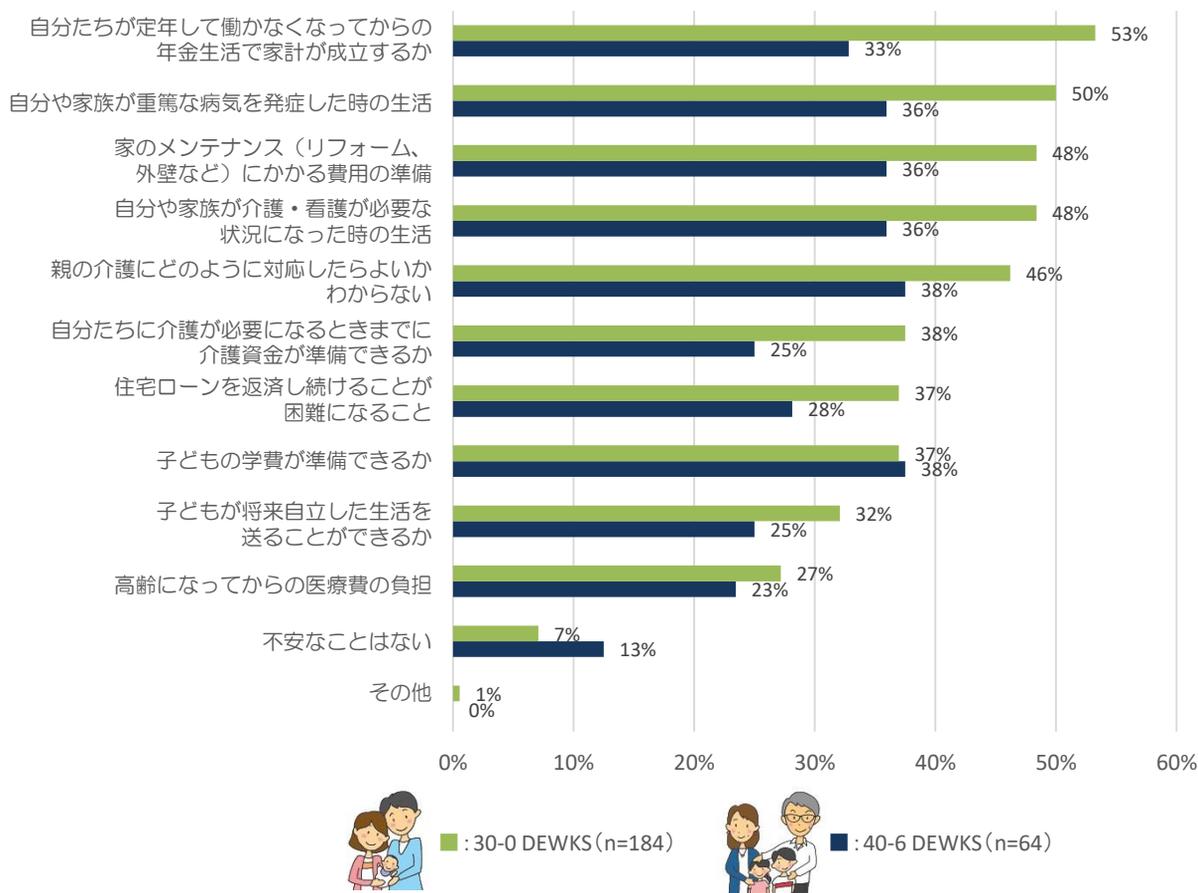
30-0 DEWKSに共通して言えることは、現時点からすると何十年も先のことを、心配しているという点です。まだ遠い将来に対して不安があり、「今は漠然としているけれど確実に来る将来」に対する不安感が高いことが読み取れます。こうした不安感が、ここまで見てきたような長期的な視座に立った、計画性につながっている可能性があります。

アンケートの結果を見ると、不安に感じる回答が最も多いのは、「自分たちが定年して働かなくなってからの年金生活で家計が成立するか」で53%となっています。

40-6 DEWKSと並べてみると、ほぼすべての項目で30-0DEWKSの不安感が高いことがわかります。

40-6 DEWKSが不安に感じている項目をみると、「親の介護にどのように対応したらよいかわからない」（38%）、「子どもの学費が準備できるか」（38%）など、身近に迫った内容について不安感を抱いています。

■ 将来の不安



いつ見舞われるかイメージのつきにくい将来に不安を感じる30-0 DEWKSと、差し迫った自分たちの生活の課題に不安を感じる40-6 DEWKSには、将来不安に対する意識に差があると考えられます。

30-0 DEWKSの不安感については、自分たちの将来について見通しを立てようとする姿勢の表れでもあり、考えられ、注目すべき点です。

2 「早期建築・長期居住」の価値観

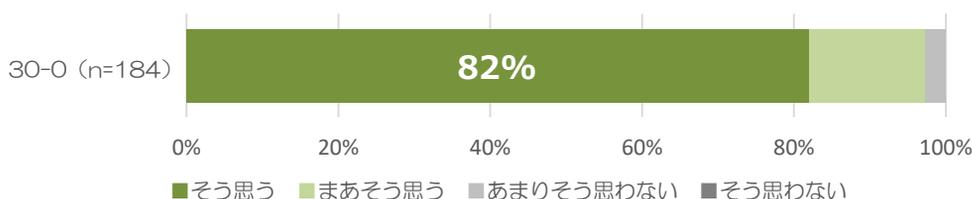
2-4. 老後まで長く住めることが、長持ちする住宅の価値

ここまで、30-0 DEWKSが長期的な視点を持ち、将来を見据えて家を建てる意識を明らかにしてきました。30-0 DEWKSは不確定である将来について考える意識が、高いとすることができます。

では、将来を見据えて家を建てる30-0 DEWKSにとって、長期間使うことのできる、「長持ちする住宅の価値」とは何なのでしょう。

アンケート結果から、30-0 DEWKSは「自分たちが定年後まで住み続けられる」ことが長持ちする住宅の価値と捉えている（82%）ことがわかりました。

■長持ちする住宅の価値とは「自分たちが定年後まで住み続けられる」こと（30-0）



同じ項目での40-6 DEWKSは、「そう思う」が52%となっています。30-0 DEWKSと40-6 DEWKSでは老後までの期間が異なり、長期間使うことのできる「長持ちする住宅」が、置かれているライフステージによって異なった捉え方をされていることがわかります。

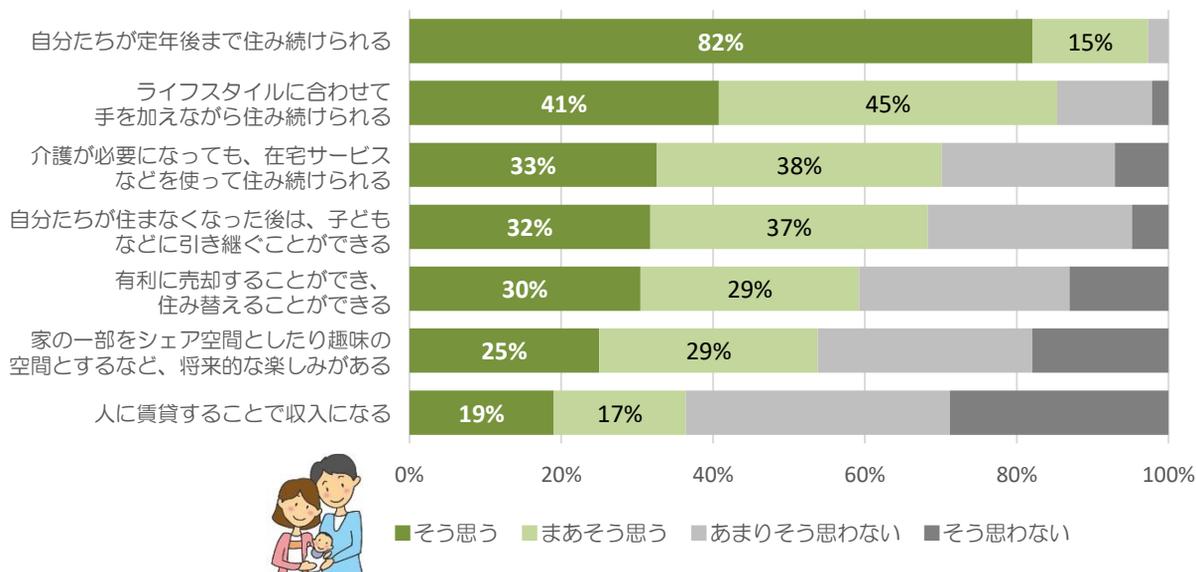
■長持ちする住宅の価値とは「自分たちが定年後まで住み続けられる」こと（40-6）



2-4. 老後まで長く住めることが、長持ちする住宅の価値 続き

30-0 DEWKSで続いて多いのは、「ライフスタイルに合わせて手を加えながら住み続けられる」（41%）、「介護が必要になっても、在宅サービスなどを使って住み続けられる」（33%）、となっており、自らが長期間にわたり、住み続けられることを、「長持ちする住宅の価値」として捉えていることがわかります。

■長持ちする住宅の価値とは（30-0）



2-5. 「今」の不安に答え、「ずっと住める」住宅を取得する

ここまで見てきたように、30-0 DEWKSの家を建てる意識には、早期建築・長期居住の価値観があります。具体的には、以下の4つのポイントが挙げられます。

- ①今建てることに、長期的な住宅コストを確定させるメリットを感じている。
- ②今建てることに、「ライフスタイルが**未確定**である」点でデメリットを感じている。
（**未確定**をデメリットと感じているからこそ、人生を全体最適化するためのアドバイスニーズがあると考えられます。）
- ③今は漠然としているが、確実に来る将来に対する不安がある。
- ④長持ちする住宅の価値は、自分たちが老後まで住めること。

こうした30-0 DEWKSの意識を踏まえると、**住まいには「今」の不安に答え、「ずっと住める」安心感が求められている**と言えます。

3 共働きで支え合う生活設計

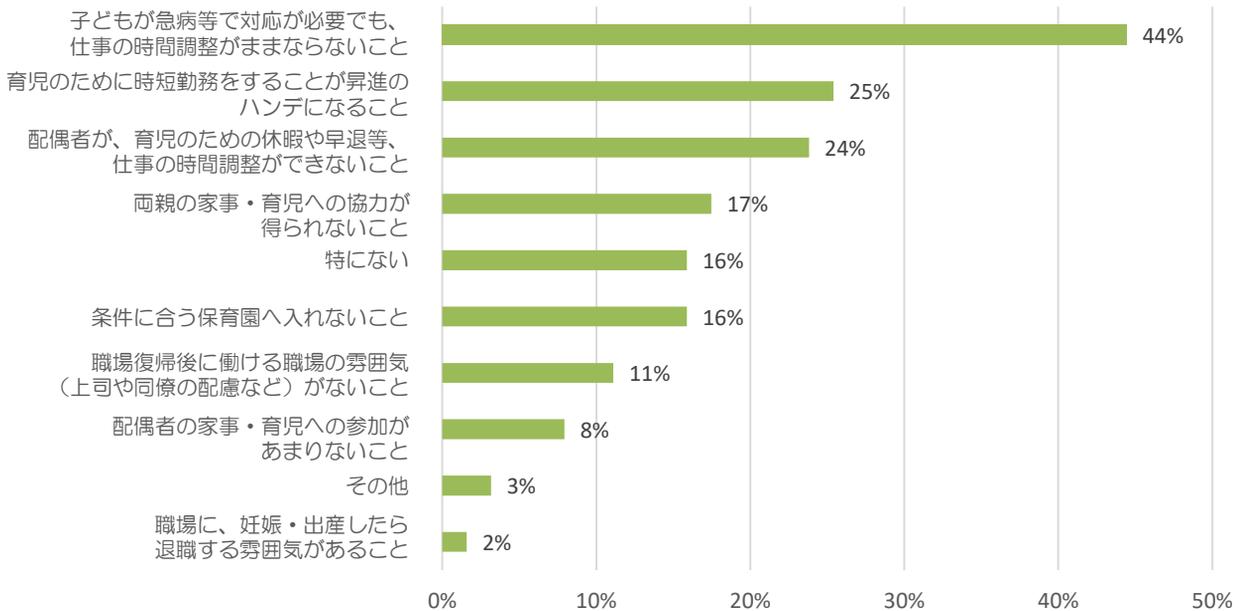
3-1. 共働きのハードルに変化 — 「働く困難さ」から「希望のキャリアを形成する困難さ」へシフト —

30-0 DEWKSが感じる共働きのハードル

ここでは、30-0 DEWKSがこれまでのくらしで共働きのハードルと感じたことを見ていきます。

30-0 DEWKSが感じる共働きのハードルで最も多いのは「子どもが急病等で対応が必要でも、仕事の時間調整がままならないこと」(39%)となっています。続いて、「育児のために時短勤務をすることが昇進のハンデになること」(27%)となっています。

■ 共働きのハードル (30-0、現在長子が1歳以上)



■ : 30-0 DEWKS (n=63)

3-1. 共働きのハードルに変化 — 「働く困難さ」から「希望のキャリアを形成する困難さ」へシフト — 続き

共働きのハードルと感ずることは、特に女性の意識で差がある

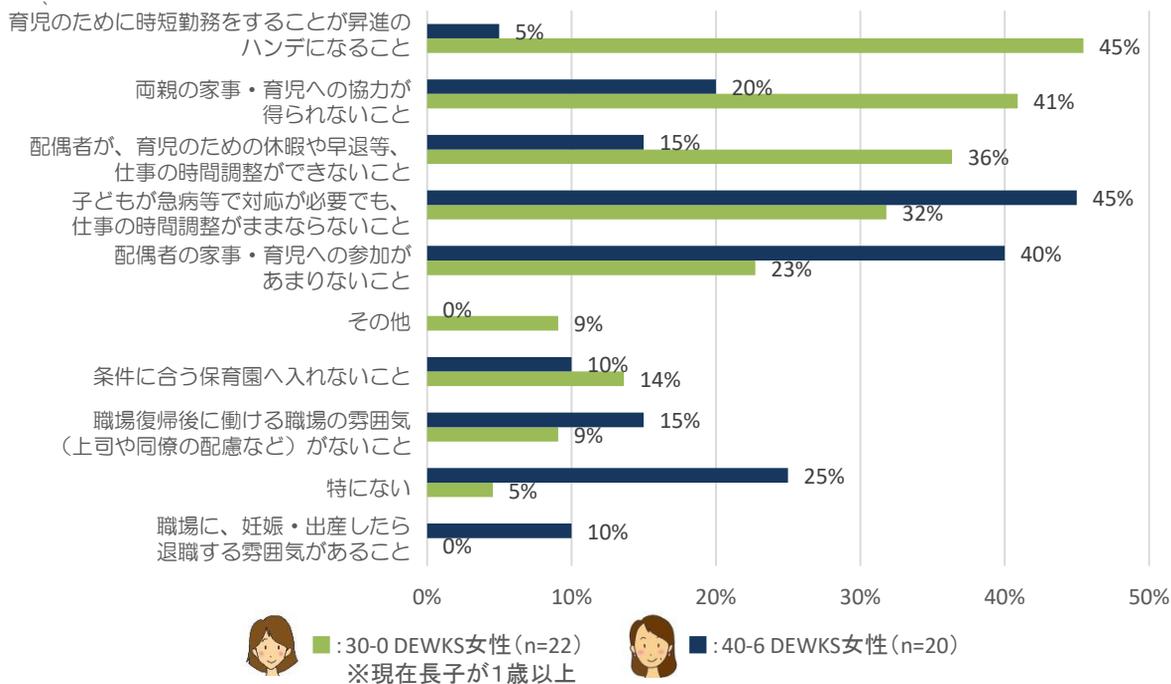
ここで、女性の意識に着目し、30-0 DEWKSと40-6 DEWKSの違いを見ていきます。女性の意識に着目すると、年代により共働きのハードルが「働く困難さ」から「希望のキャリアを形成する困難さ」へシフトしていることが浮き彫りになります。

30-0 DEWKSと40-6 DEWKSの際立った違いは、「育児のために時短勤務をすることが昇進のハンデになること」に対する意識です。40-6 DEWKSでは5%にとどまるのに対し、30-0 DEWKSでは42%の方が共働きのハードルとなる意識を持っています。自身の成長や自己実現の手段として仕事が重要なものという認識を持っていることがわかります。

また、「子どもが急病等で対応が必要でも、仕事の時間調整がままならないこと」、「配偶者の家事・育児への参加があまりないこと」については、30-0 DEWKS女性のほうが、障害となるとする回答が少なくなっており、緊急時に男性が仕事を調整しやすくなったことや、男性が家事・育児に関与していることが伺えます。

I章で見たように、結婚・妊娠・出産を経て就業を継続することが一般化したことで、「働き続けること」そのものから、「キャリア形成」へ問題意識がシフトしたと考えられます。

■ 共働きのハードル（女性）



女性の意識に着目すると、大きく2つの点が注目されます。1つは、共働きで働き続けることの困難さの**変化**です。先述の通り、30-0 DEWKSでは、子どもの急病時の緊急対応や、配偶者の家事・育児への参加がないことが共働きの障害となっている割合は少なくなっています。働くことと、家事・育児の両立の難易度が下がっている可能性が考えられます。

2つ目は、「希望のキャリアを形成する困難さ」の**顕在化**です。「育児のために時短勤務をすることが昇進のハンデになる」という意識が30-0 DEWKSで突出して高くなっていることから、働き続けることよりも、いかに、希望のキャリアを形成できるか、自己実現できるか、という観点での困難さが認識されています。

こうした変化は、どのような理由によるものなのでしょうか。第I章で見たような社会の変化に加え、生活意識や価値観の変化であると考えられます。そこで次節以降で、夫婦で支え合ってくらす意識について見ていきます。

3 共働きで支え合う生活設計

3-2. 「家計」も「家事・育児」も支え合うという夫婦の共通認識

ここでは、生活する上での夫婦間での共通認識を確認します。

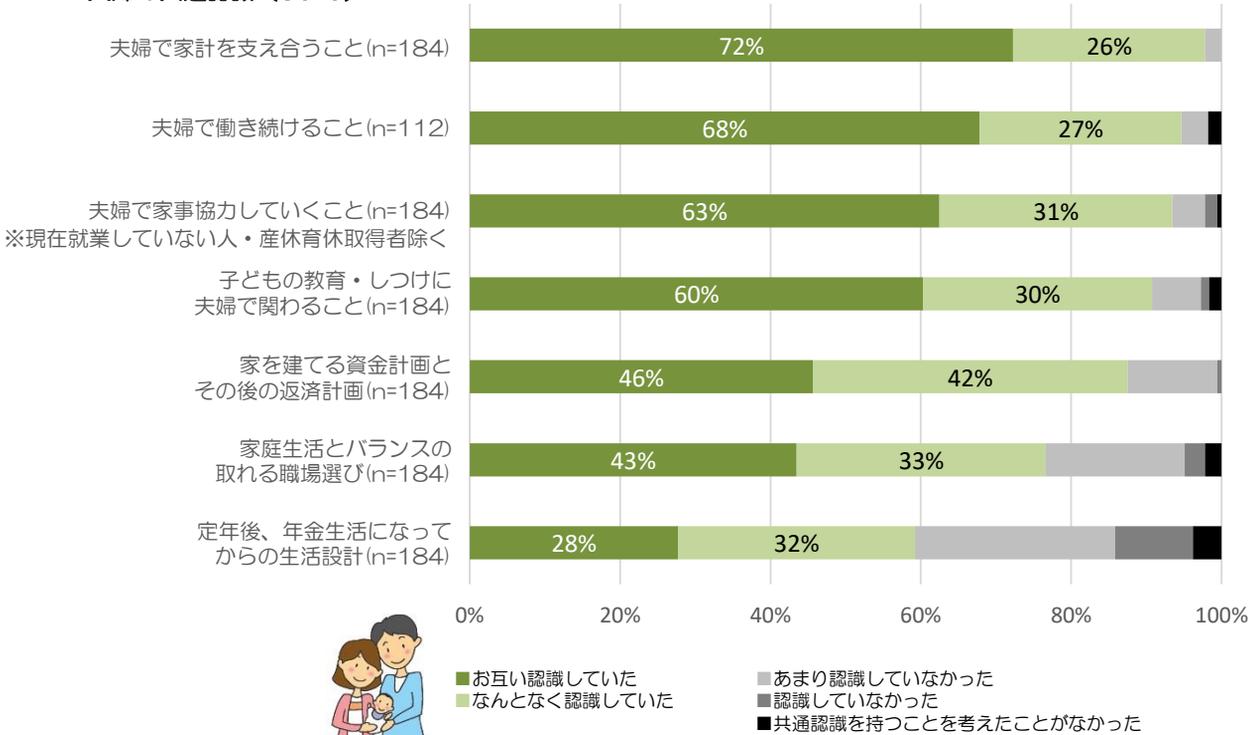
アンケート結果から共通して言えることは、30-0 DEWKSは夫婦で支え合う意識が非常に高いということです。

夫婦間での共通認識が高いものとして「夫婦で家計を支え合うこと」（72%）、「夫婦で働き続けること」（68%）といった、働き方に関する共通認識が続きます。夫婦で働き、家計を支えていくことが夫婦間で共有されていることが伺えます。

続いて「夫婦で家事協力していくこと」（63%）、「子どもの教育・しつけに夫婦で関わること」（60%）といった家事・育児についての共通認識があります。

ここまでの項目は、「お互い認識していた」「なんとなく認識していた」まで含めると90%以上の比率となっており、30-0 DEWKSにおいてはごく一般的なことでありと捉えることができます。

■ 夫婦の共通認識（30-0）



ここまで見てきた全体像を、とくに共有されている2つの事柄に整理し、夫婦間で共有する共通認識にどのような傾向があったのか確認します。

また、分析の軸として、「男女間の意識差」や「世帯年収に占める夫婦の年収比」を中心に、意識を確認していきます。

- 1つ目は、働くことについての共通認識です。
- 2つ目は、家事・育児についての共通認識です。

3-2. 「家計」も「家事・育児」も支え合うという夫婦の共通認識 続き

3-2-1. 働くことについての共通認識

①夫婦で働き続ける意識

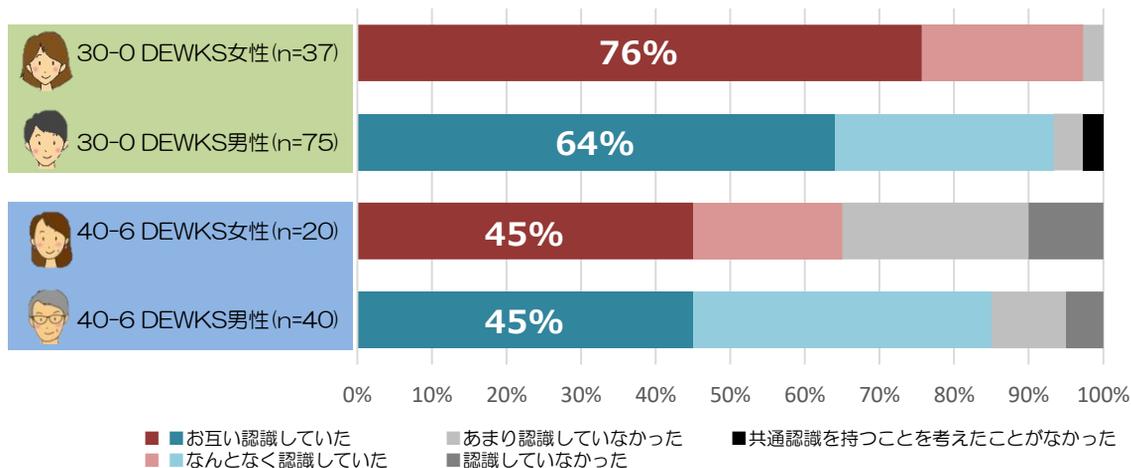
「夫婦で働き続けること」については、30-0 DEWKSの68%が「お互い認識している」としています。

男女で比較をすると、「お互い認識している」とする男性が64%に対し、女性は76%となっており、特に女性に高い傾向です。

夫婦での家事シェアが進み始め、夫婦関係がフラットになり始めた世代とされる40-6 DEWKS※では「お互い認識している」とした人が男女ともに45%となっており、30-0 DEWKSの方がより高い割合で共通認識を持っていることがわかります。

※参考：旭化成ホームズ共働き家族研究所 2012～2014年「子育て期共働き家族・専業主婦家族 調査」

■夫婦で働き続ける共通認識



3 共働きで支え合う生活設計

3-2. 「家計」も「家事・育児」も支え合うという夫婦の共通認識 続き

3-2-1. 働くことについての共通認識 続き

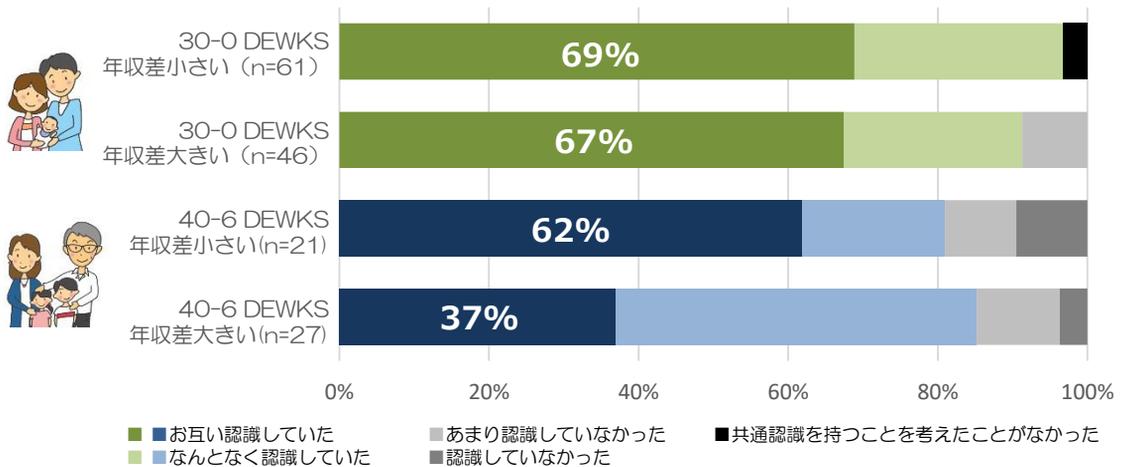
②夫婦で働き続ける意識 一夫婦の年収比率による意識の違いー

また、30-0 DEWKS夫婦の年収比率に着目すると、年収差の小さい夫婦で69%が「お互い認識している」としています。年収差の大きい夫婦では67%であり、ほとんど共通認識には差がありません。

一方、40-6 DEWKSにおいては年収差の小さい夫婦の62%が「お互い認識している」としている一方で、年収差の大きい夫婦では37%で、年収差の小さい夫婦の方が、より高い共通認識を持っています。

40-6 DEWKSでは年収差が役割意識に反映されていますが、30-0 DEWKSでは差がありません。30-0 DEWKSでは年収差があっても夫婦で働き続けるという共通認識を持っており、注目されます。

■ 夫婦で働き続ける共通認識（年収比率分析）



※年収の差が小さいとは、夫と妻の収入比率が概ね4：6～6：4と回答された場合を指し、その他を年収の差が大きいとしています。

3-2. 「家計」も「家事・育児」も支え合うという夫婦の共通認識 続き

3-2-1. 働くことについての共通認識 続き

③夫婦で家計を支え合う意識

「夫婦で家計を支え合う意識」については、30-0 DEWKSの72%が「お互い認識している」としています。

男女で比較をすると、「お互い認識している」とする男性が71%に対し、女性は75%となっており、男女間での差はほとんど見られません。

また、夫婦の年収比率による意識の差が見られない点も、前項と同様の傾向です。

3 共働きで支え合う生活設計

3-2. 「家計」も「家事・育児」も支え合うという夫婦の共通認識 続き

3-2-2. 家事・育児についての共通認識

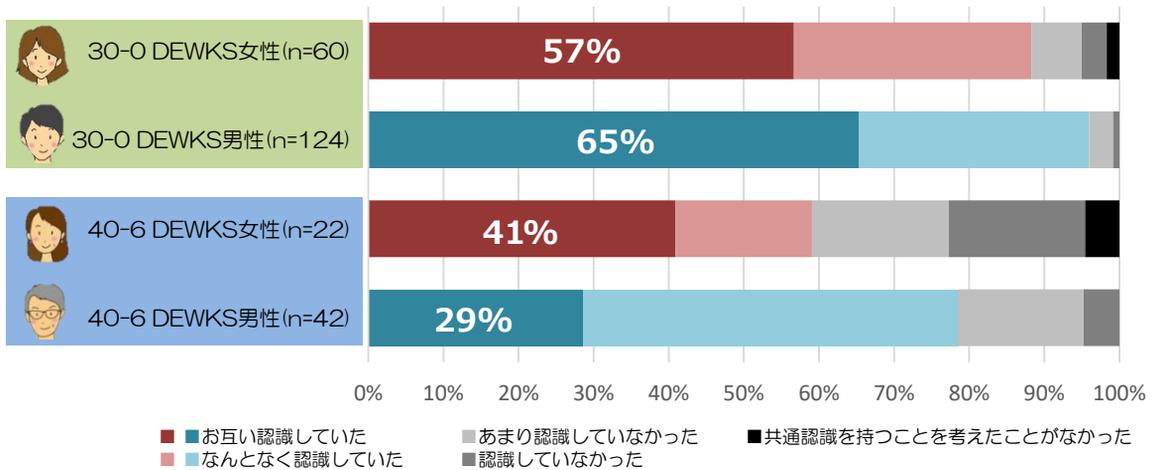
①夫婦で家事協力していくこと

「夫婦で家事協力していくこと」については、30-0 DEWKSの63%が「お互い認識している」としています。

男女で比較をすると、「お互い認識している」とする女性が57%に対し、男性は65%となっており、特に、男性の家事協力への意識が高いことが見て取れます。

40-6 DEWKSでは「お互い認識している」とする男性は29%、女性では41%となっており、男女間の認識の差があり、特に男性の意識が低い点が特徴です。

■夫婦で家事協力していく共通認識



3-2. 「家計」も「家事・育児」も支え合うという夫婦の共通認識 続き

3-2-2. 家事・育児についての共通認識 続き

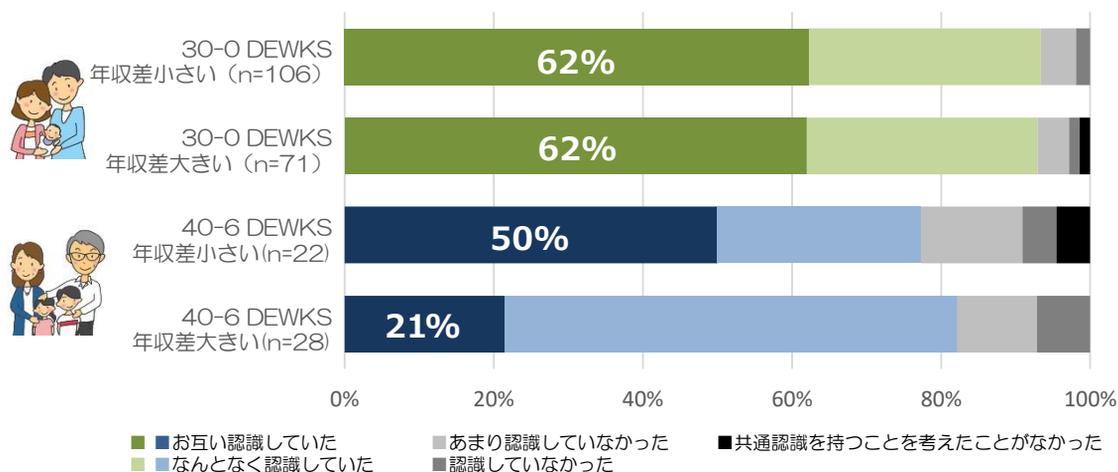
②夫婦で家事協力していくこと —夫婦の年収比率による意識の違い—

30-0 DEWKS夫婦の年収比率に着目すると、年収差の大小に関わらず、ともに62%が「お互い認識している」としています。夫婦の年収比率ごとの共通認識の差は見られません。

40-6 DEWKSにおいては年収差の小さい夫婦では50%が「お互い認識している」としている一方で、年収差の大きい夫婦では21%となっており、年収差の小さい夫婦の方が、より高い共通認識を持っています。

ここでも、夫婦の年収差によって、夫婦間の共通意識に差があることがわかりました。

■夫婦で家事協力していく共通認識（年収比率分析）



※年収の差が小さいとは、夫と妻の収入比率が概ね4：6～6：4と回答された場合を指し、その他を年収の差が大きいとしています。

③子どもの教育・しつけに夫婦で関わること

「子どもの教育・しつけに夫婦で関わること」については、30-0 DEWKSの72%が「お互い認識している」としています。

男女で比較をすると、「お互い認識している」とする男性が71%に対し、女性は75%となっており、男女での意識の差は見られません。

また、夫婦の年収比率による意識の差も見られません。

3 共働きで支え合う生活設計

3-2. 「家計」も「家事・育児」も支え合うという夫婦の共通認識 続き

3-2-3. 夫婦の共通認識のあり方に見る「共働きで支え合う生活設計」

ここまで見てきた通り、30-0 DEWKSは、夫婦で働くことや、家事・育児に関わり合うことに対する夫婦の共通認識が高いことがわかります。また、共通認識を持つ割合が高いだけでなく、年収比率による意識に差がない点が特筆されます。

夫婦関係がフラットになっているとされる40-6 DEWKSにおいては、男女による違いや年収比率による意識の差が存在しました。

30-0 DEWKSは、夫婦で支え合う意識が非常に高いとすることができます。

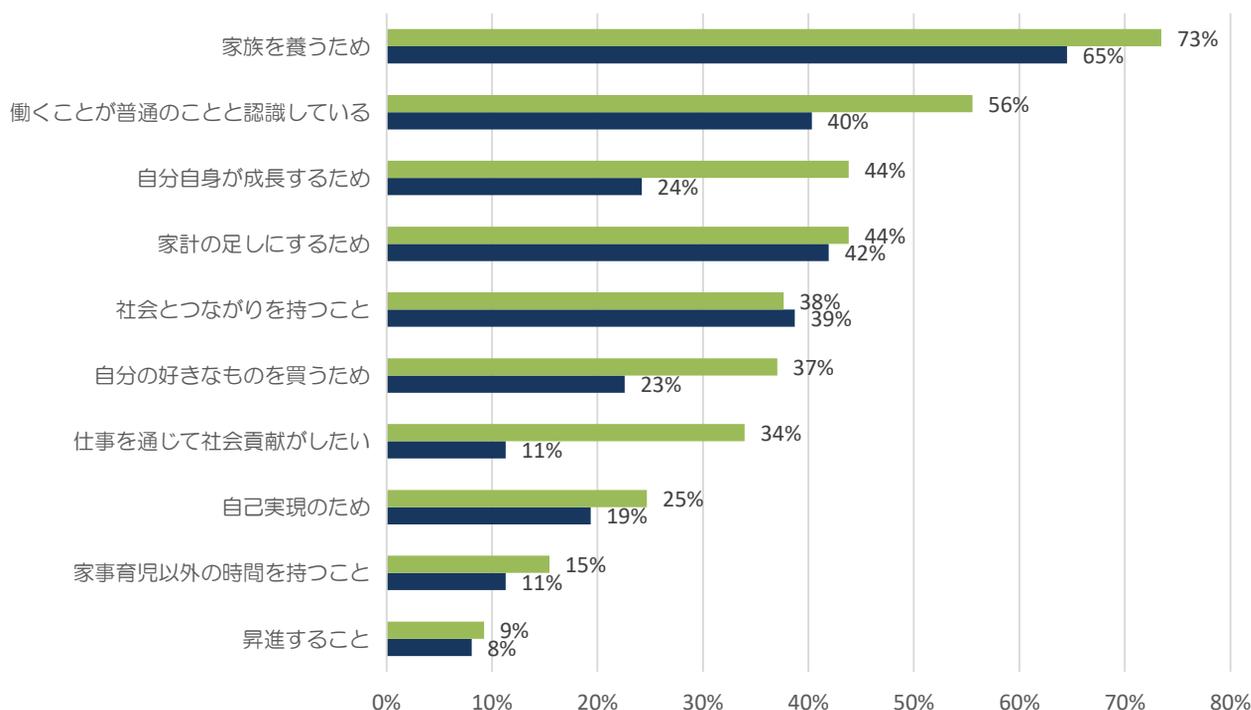
3-3. 働く目的の世代間ギャップ —働くことで成長していくという意識—

働くことを前向きに捉える30-0 DEWKS

ここでは、30-0 DEWKSと40-6 DEWKSの働く目的について特徴を捉えます。

「家族を養うため」に働くは、働く最大の目的になっています。30-0 DEWKSの特徴は、「自分自身が成長するため」「自分の好きなものを買うため」「仕事を通じて社会貢献がしたい」という回答が、40-6 DEWKSに比べて多い点です。

■働く目的



■ : 30-0 DEWKS (n=162)



■ : 40-6 DEWKS (n=62)

3 共働きで支え合う生活設計

3-3. 働く目的の世代間ギャップ —働くことで成長していくという意識— 続き

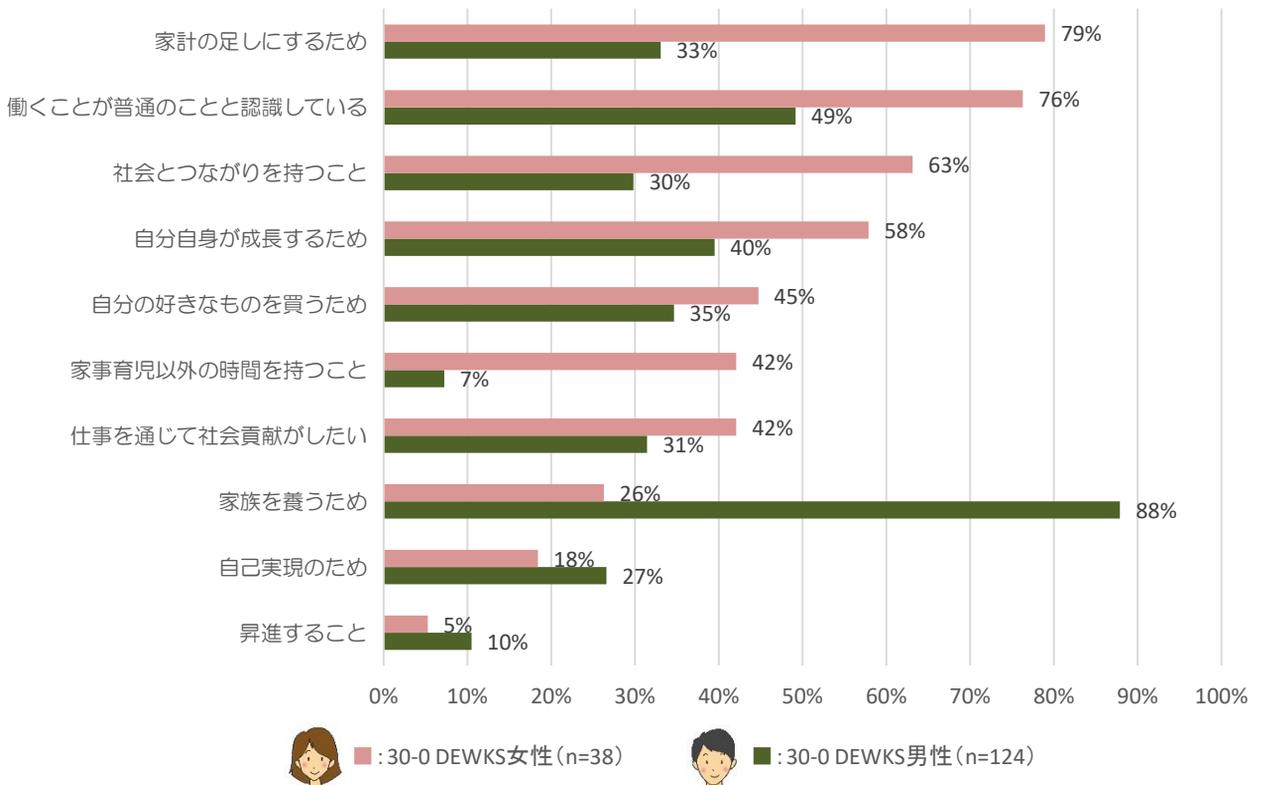
特に30-0 DEWKS女性で前向きな意識が高い

次に、30-0 DEWKSの男女の意識差について確認してみると、「家族を養うため」という回答は男性に多く、女性に少ないことがわかります。

また、「働くことが普通と認識している」という回答は女性の方が多い結果となっており、注目されます。女性の回答で最も多いのは「家計の足しにするため」（79%）、「働くことが普通と認識している」（76%）、「社会とつながりを持つこと」（63%）、「家事育児以外の時間を持つこと」（42%）となっています。

男女間で働く目的に違いがあることがわかります。

■働く目的（30-0 DEWKS、男女の意識差）



3-3. 働く目的の世代間ギャップ —働くことで成長していくという意識— 続き

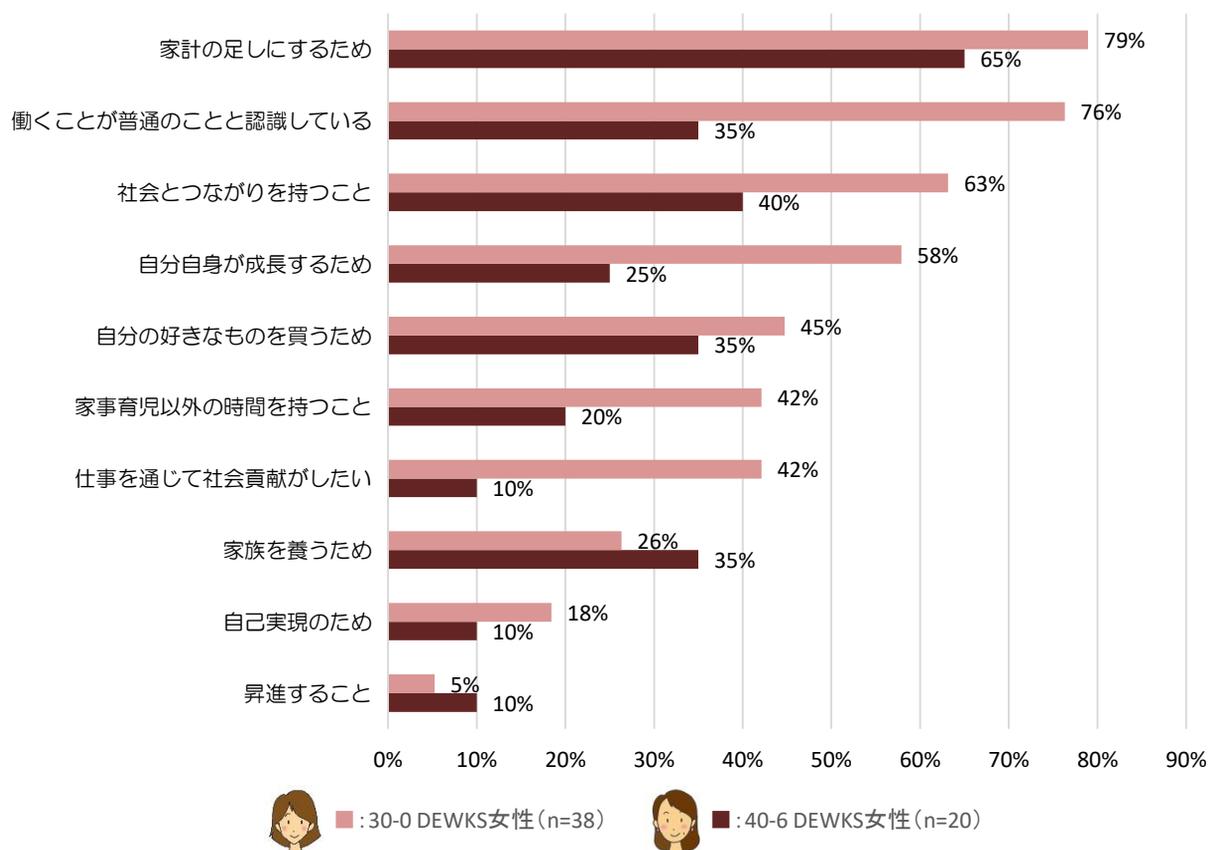
30-0 DEWKS女性と40-6 DEWKS女性で働く目的にギャップがある

先に見たように、30-0 DEWKS女性の働く目的に共通して言えることは、働くということに対し、収入以外の目的意識を高く持っている点です。

30-0 DEWKS女性と、40-6 DEWKS女性との、働く目的の違いを見ると、共通して「家計の足しにするため」という回答が最も多くなっていますが、差が大きい項目もあります。

差が大きいのは、「働くことが普通のことと認識している」（41pt差）、「自分自身が成長するため」（33pt差）、「仕事を通じて社会貢献がしたい」（32pt差）、「社会とつながりを持つこと」（23pt差）、「家事育児以外の時間を持つこと」（22pt差）となっています。こうしたことから、年代による、女性の働く意識の違いが見て取れます。

■ 働く目的（30-0 DEWKS、40-6 DEWKS 女性の意識差）



ここまで見てきた通り、30-0 DEWKS、特に女性の働く目的に、「自分自身が成長するため」「仕事を通じて社会貢献がしたい」のように、働くことで自分を成長させたいという前向きな目的があることが、注目されます。

これは、Ⅰ章で見たように、結婚・妊娠・出産を経て就業継続することが一般化し、仕事を通じて活躍することがイメージしやすくなった結果、働く目的意識にも変化が見られたと考えられます。



30-0 DEWKSの家づくりの課題

第三章では、30-0 DEWKSのくらしの実態を見ていきます。

子どもが乳幼児期から、夫婦の老後まで長期間住み続けることを想定する30-0 DEWKSの家づくりには、子どもの成長に伴う柔軟性、可変性が求められ、課題になっています。

ここでは、①LDK、②子ども部屋について実態を確認した上で、以下の2つの提案を行います。

- ①LDKに隣接した3畳程度の「BLANK（余白）空間」
- ②長期的な時間経過を見越した、子ども部屋の活用方法

30-0 DEWKSのLDK

1 散らかりがちで、気になっている

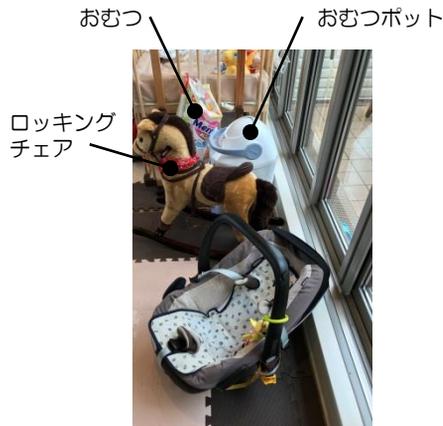
1-1. 30-0 DEWKSのLDKの実情

まず始めに実際の30-0 DEWKSの住まいを見てみましょう。乳幼児の子どもが2人いる共働き世帯です。

テレビの脇にはおもちゃ収納があり、こまごまとしたおもちゃが収納されています。ソファ脇の子ども用のテントとおむつ収納は、大きく空間を占有しており、おむつやおむつポット、ロッキングチェアなどの日常使いのものが床置きされています。テレビの前にはトランポリンも置いてあり、子どもが活発に遊んでいる様子が伺えます。育児ならではのものが、LDKにあふれている実態がわかります。

■ 実際の30-0 DEWKSのLDKの様子

写真の無断転載禁止



1-1. 30-0 DEWKSのLDKの実情 続き

乳児からの育児期には、おもちゃやおむつなどの用品が、LDKにあふれます。それは、この時期の生活の中心が、LDKであるからです。

特におもちゃに関しては、子ども用テントや、おままごとのキッチンセットなど、小さい子どもの使うおもちゃほど、サイズが大きい傾向があります。

子どもがひとり遊びを始めるようになると、ブロックや積み木、小さい電車や車のおもちゃなど細かいものが増え始め、片付けはさらに大変になっていきます。

ここで、30-0 DEWKSの声をご覧ください。

■ LDKにあふれる子どものものについてどう思うか



来客があるたびに、慌てて片付けないと、リビングに通すことができない。



子どもたちも寝る前には全て片付けてはいるが、まだ子どもだけではやりきれない為、手間に感じる。



子どものものはカラフルな物が多く、リビングやダイニングの中では異彩を放っている。



掃除機ロボットの稼働時に障害となる。



見た目や足のふみ場に困る。掃除がしにくかったり、おもちゃが壊れたりすることもある。



小さなおもちゃを踏んで痛い思いをする。

こうした実情を見ると、おもちゃや育児用品を、LDKと別の空間に置くことができるようになると、LDKはすっきりした状態を維持できると考えられます。

30-0 DEWKSと畳の部屋

2

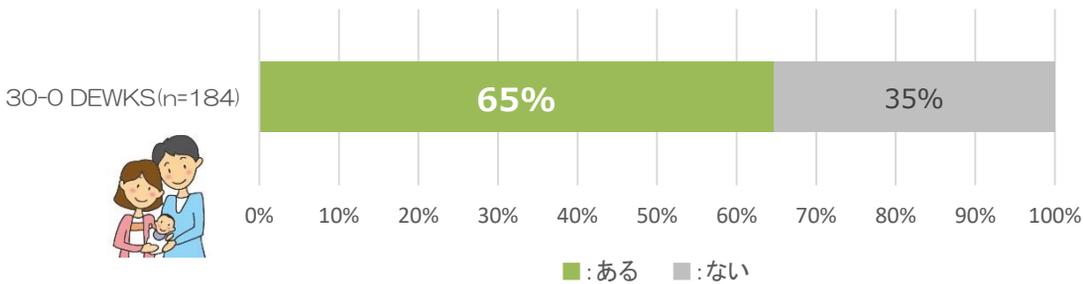
育児期には特に、畳の部屋に人と物が集まる。

2-1. 30-0 DEWKSの65%がLDKに隣接した畳部屋をつくっている

30-0 DEWKSの65%があらかじめLDKに隣接した畳の部屋を作っています。

子どもが生まれる前と生まれた後で比較すると、家を建てる契約をした時点で「子どもが生まれる前」の30-0 DEWKSでは60%が畳の部屋を作り、「子どもが生まれた後」では73%が畳の部屋を作っています。いずれも、高い比率で畳の部屋を作っていますが、子どもが生まれた後に家づくりを考えた30-0 DEWKSで、特に畳部屋を作る比率が高くなっている点が注目されます。

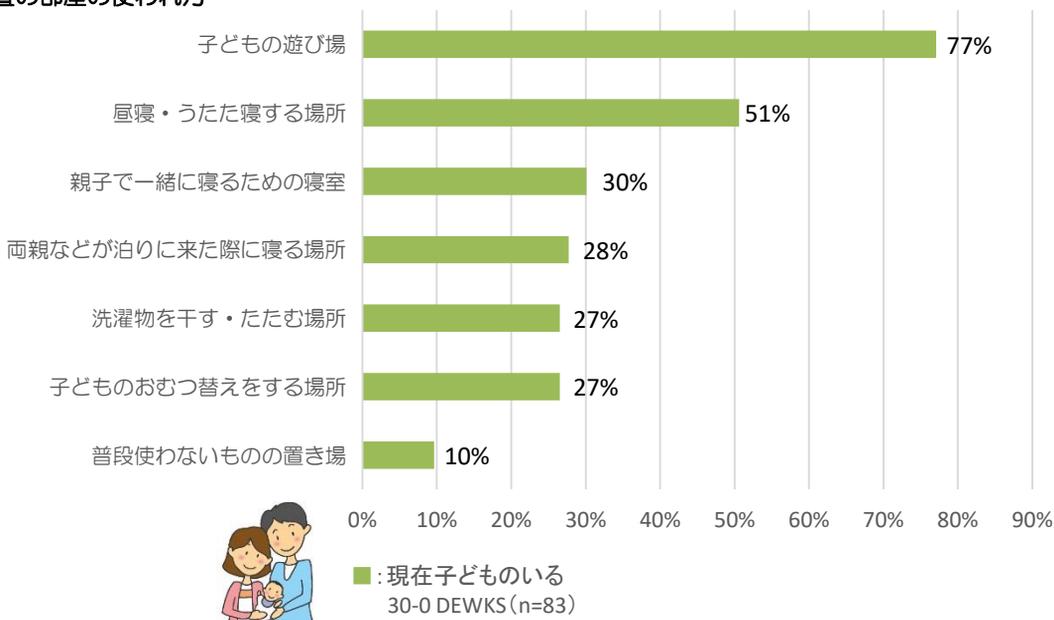
■畳の部屋があるか



それでは、その畳の部屋は、どのような使い方をされていて、どのようなものが置かれているのでしょうか。

まず、「現在子どものいる30-0 DEWKS」に絞って、畳の部屋をどのように使っているかを確認します。全体として、家事・育児の場や来客時の寝室として、多様に使われている様子がわかります。最も多いのは「子どもの遊び場」(77%)で、続いて「昼寝・うたた寝する場所」(51%)、「親子で一緒に寝るための寝室」(30%)となっています。

■畳の部屋の使い方



2-1. 30-0 DEWKSの65%がLDKに隣接した畳部屋をつくっている 続き

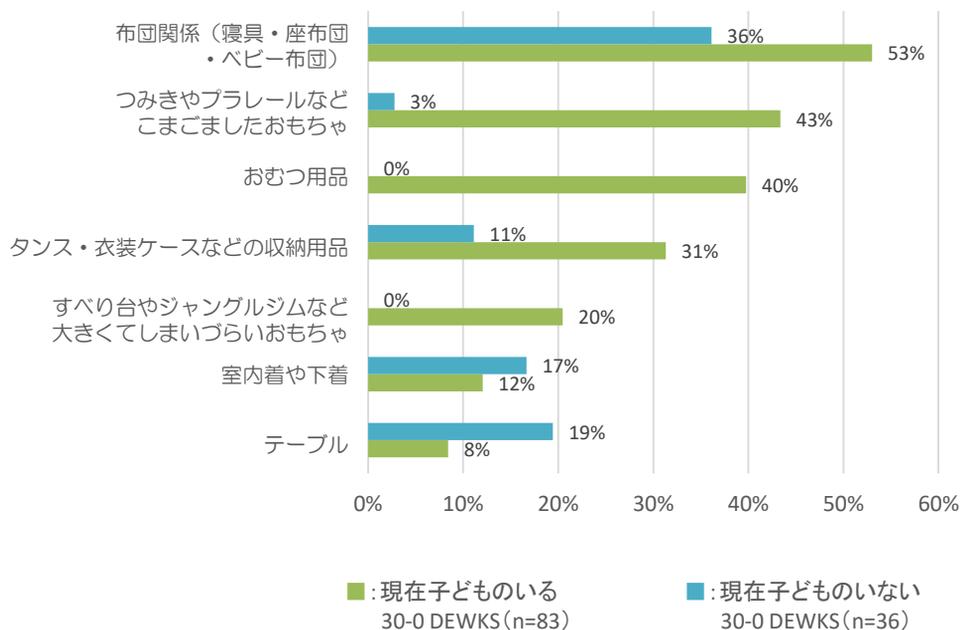
次に、畳部屋に置いてあるものを確認していきましょう。

子どもが生まれる前／後に関わらず、最も置かれているのは「布団関係（寝具・座布団・ベビー布団）」です。

子どもがいる30-0DEWKSで多いのは、「積みきやプラレールなどのこまごましたおもちゃ」や「おむつ用品」、「タンス・衣装ケースなどの収納用品」となっています。また、「すべり台やジャングルジムなど大きすぎてしまいづらいおもちゃ」も一定数おり、育児の場所として使われていることが伺えます。

子どものいない30-0DEWKSでは、「テーブル」がやや多くなっており、物を置くよりは、居場所として使われていることが推測されます。

■畳の部屋に置かれているもの



30-0 DEWKSと畳の部屋

2 育児期には特に、畳の部屋に人と物が集まる。

2-2. 畳の部屋は高評価

ここで、畳の部屋の評価を、30-0 DEWKSの声に沿って見ていきます。

■畳の部屋についてどう思うか



小さい子どものお昼寝に便利。



パジャマなどよく使うものを置いておくのに良い。



子どもの遊ぶ遊具を置くことができる。



取り込んだ洗濯物を畳んだりするのに便利。



押し入れがあり、来客用の布団など日常的には使わないが嵩張るアイテムを収納できる。



来客の際、一時的に荷物を置いておける。



洗濯物や一時的な買い物の品を置ける。



子どものおもちゃを収納でき、子どもたちも畳の部屋で遊ぶことができる。

ここで、先輩30-0 DEWKSの声を見ると、同じく高評価になっています。

■先輩はこう言った「10年前に家を建てた30-0 DEWKSの声」

子どもが小さい時は畳の部屋で遊んだり、昼寝させたりしやすかった。小学生になった今は学習スペース的に利用していて、私からも目が届く。



先輩30-0 DEWKS

普段の動線外なので、気にならない

リビング・ダイニングに置ききれない物や洗濯物を一時的に置くのに重宝している。

一方で、「部屋としてあって良かったが、畳である必要はなかった」といった声もあり、置くものや使い方によっては、床の素材に配慮が必要です。

子ども部屋の使われ方の実態

3

「子ども部屋」は最初の10年は「おとなの多目的部屋」

3-1. 子ども部屋は建築当初から多目的利用を想定

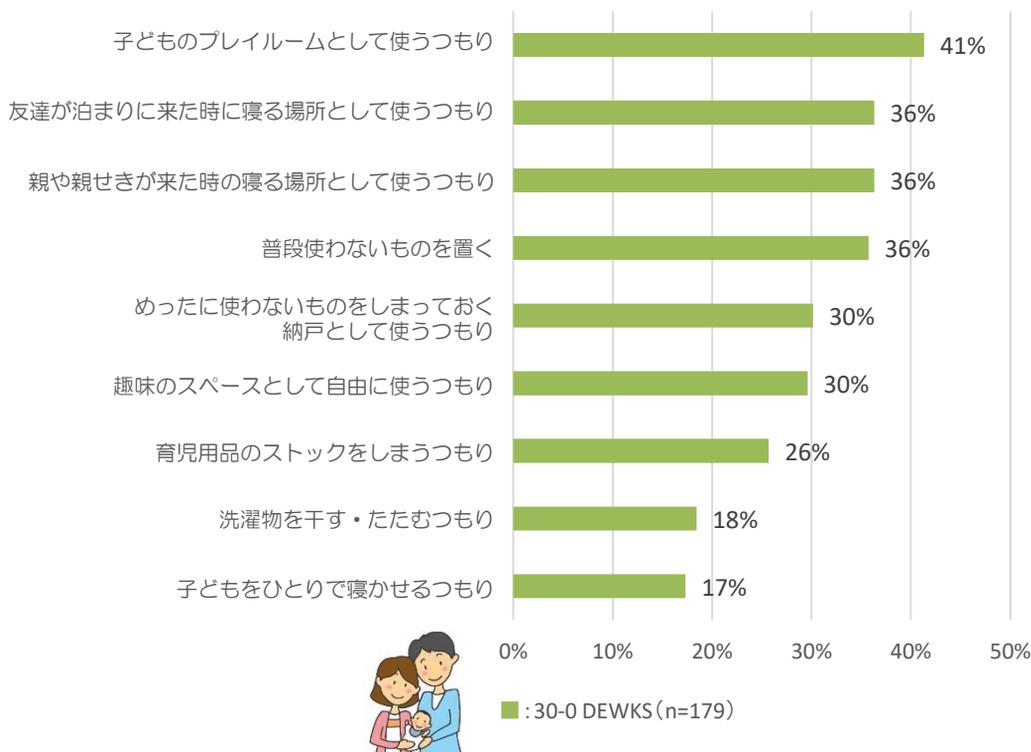
子ども部屋の使われ方の実態を見ていきます。

まず、30-0 DEWKSが、まだ子どもが専有していない子ども部屋を、どのように使っていくつもりなのか、意識を確認します。

最も多いのは、「子どものプレイルームとして使うつもり」（41%）となっています。続いて、「友達が泊まりに来た時に寝る場所として使うつもり」（36%）、「親や親せきが来た時の寝る場所として使うつもり」（36%）「普段使わないものを置く」（36%）となっています。

子どものためだけでなく、大人の来客時の寝室や収納にする意識も高くなっています。

■ 子ども部屋をどのように使っていくつもりか



子ども部屋の使われ方の実態

3 「子ども部屋」は最初の10年は「おとなの多目的部屋」

3-2. 「子ども部屋」は子どもが専有するまでの期間は「おとなの多目的部屋」

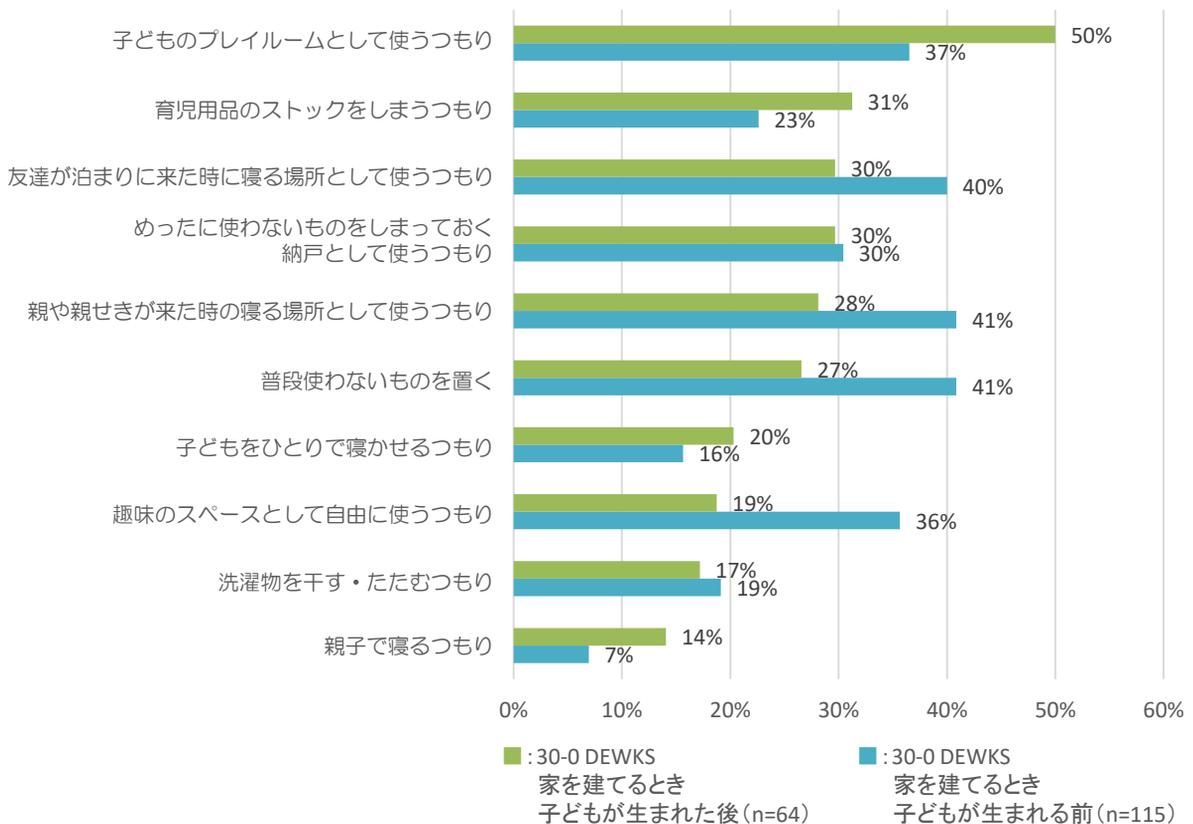
次に、家を建てた時期が子どもが「生まれる前」と「生まれた後」での意識の差を見てみましょう。

子どものプレイルームとして使う意識は、子どもが生まれた後の30-0 DEWKSに多いことがわかります（50%）。

子どもが生まれる前の意識では、「友達が泊まりに来た時に寝る場所として使うつもり」、「親や親せきが来た時の寝る場所として使うつもり」、「普段使わないものを置く」といった来客時の寝室や、収納としての意識が高いことが読み取れます。また、「趣味のスペースとして自由に使うつもり」は、子どもが生まれる前の30-0 DEWKSで36%となっており、おとなが自分たちで利用し、楽しむ意識が高いといえます。

30-0 DEWKSの意識としては、「子ども部屋」は子どもが専有するまでの期間は「おとなの多目的部屋」であると言えます。

■ 子ども部屋をどのように使っていくつもりか（子どもが生まれる前後の比較）



30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案

4 余白を活かした60年間の住みこなし

4-1. 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案

ここまでの30-0 DEWKSの実態を踏まえ、私たちは以下の空間を提案します。

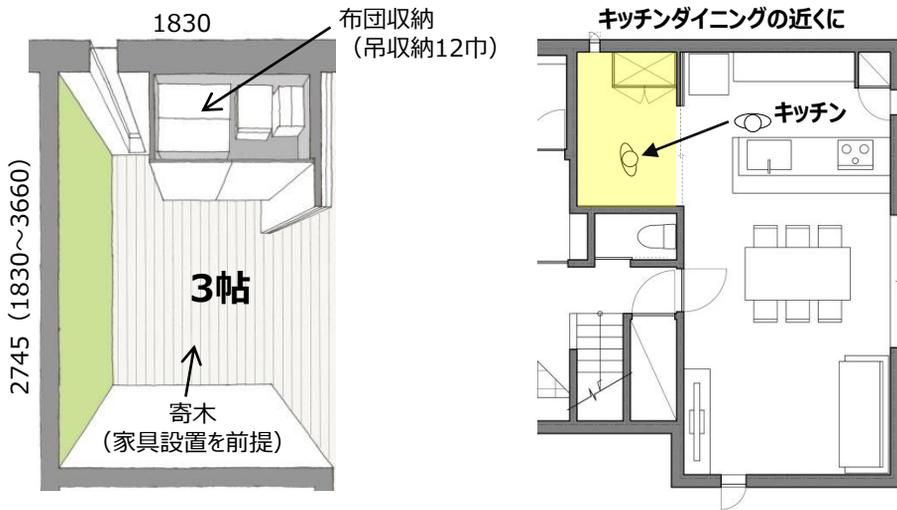
- 1つ目は、LDKをすっきりさせるための、「BLANK(余白)空間」。
- 2つ目は、「子ども部屋」の長期的な活用方法の提案です。

4-1-1. 空間の提案 –キッチンに隣接した3畳程度の省空間–

LDKに隣接した畳の部屋は、30-0 DEWKSに好評な空間であることを見ました。しかし、LDKの脇にもう一部屋用意することは、住まいの計画し、困難なケースもあります。

そこで、私たちは親の目の届きやすいキッチンの脇に、3畳程度の余白となる省空間を提案します。空間の概要は図の通りです。

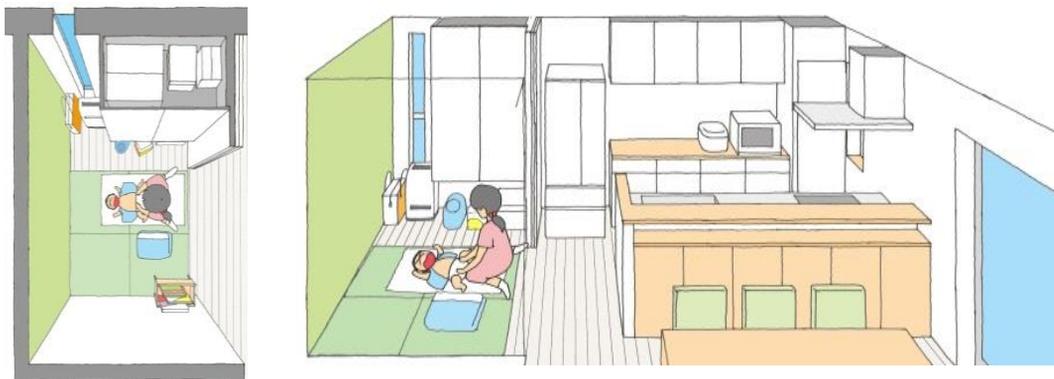
■空間の概要



ライフステージの変化に伴う空間の使い方の変化を見ていきましょう。

まずは、子どもが生まれたばかりの乳児期の様子です。親の目の届きやすい場所に、敷き畳を置くことで、子どもを寝かせておむつ替えなどをするのに、ちょうどよいスペースです。

■空間の使い方：子ども0歳



4 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案 余白を活かした60年間の住みこなし

4-1. 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案 続き

4-1-1. 空間の提案 —キッチンに隣接した3畳程度の省空間— 続き

次に、最初の子どもが3歳になった時のプレイルームとしての使い方です。親に自分のやったことを見せたがる年頃の子どもにとって、親が近くにいる中で遊ぶのは、親の安心感と、子どもの充足感につながります。

この時に、子どものおもちゃや遊具を置くことができ、さらにそこで遊ぶことができることでLDKがすっきりすることが、この空間のポイントです。

■空間の使い方：子ども3歳・0歳



さらに子どもの成長した5歳の様子です。徐々にこまごまとしたおもちゃで遊ぶようになり、片付けることも大変になってきます。

空間があることで、こうしたこまごましたおもちゃをしまっておけることや、子どもの立場からすると、せっかく作ったブロックや電車のレールなどの「成果物」をバラさなくて良いこともポイントです。

■空間の使い方：子ども5歳・2歳



4-1. 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案 続き

4-1-1. 空間の提案 –キッチンに隣接した3畳程度の省空間– 続き

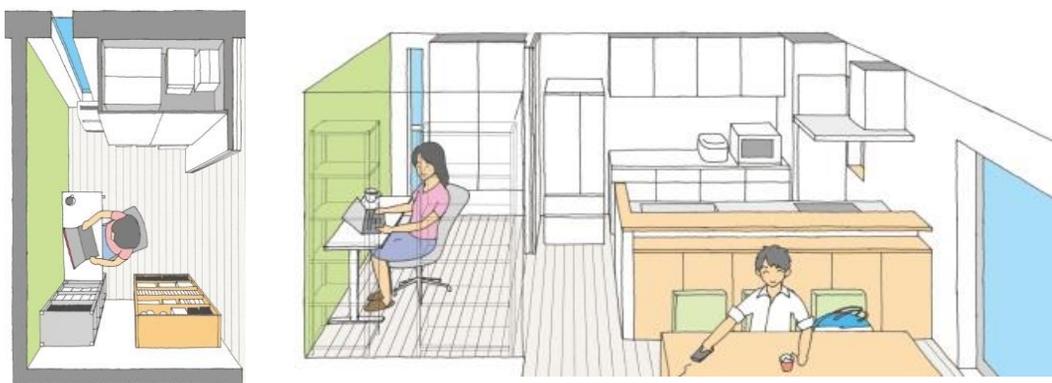
そして、子どもが10歳になった時の使い方です。
小学生の頃はリビング学習が一般的であり、親の目の届くところで、宿題をやっています。

■空間の使い方：子ども10歳・7歳



最後に、子どもが大きくなった後の、親の書斎としての使い方です。
子どもは子どものために用意された子ども部屋に移行し、大人のための空間となります、

■空間の使い方：子ども16歳・13歳



ここまで見てきたように、子どもの乳幼児期から児童期にかけて便利で、ライフステージの変化に対応することができます。空間を建築的につくりこまないことで、自分たちで家具などをうまくレイアウトして生活に合わせて住みこなすことができます。この時の家具のセレクトも、暮らしの楽しみと言えるでしょう。

この空間が長期的な子どもの居場所となり、すっきりとしたLDKを支え続けます。

4 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案
 4 余白を活かした60年間の住みこなし

4-1. 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案 続き

4-1-2. 「子ども部屋」×「おとなの多目的部屋」の使い方変化の提案

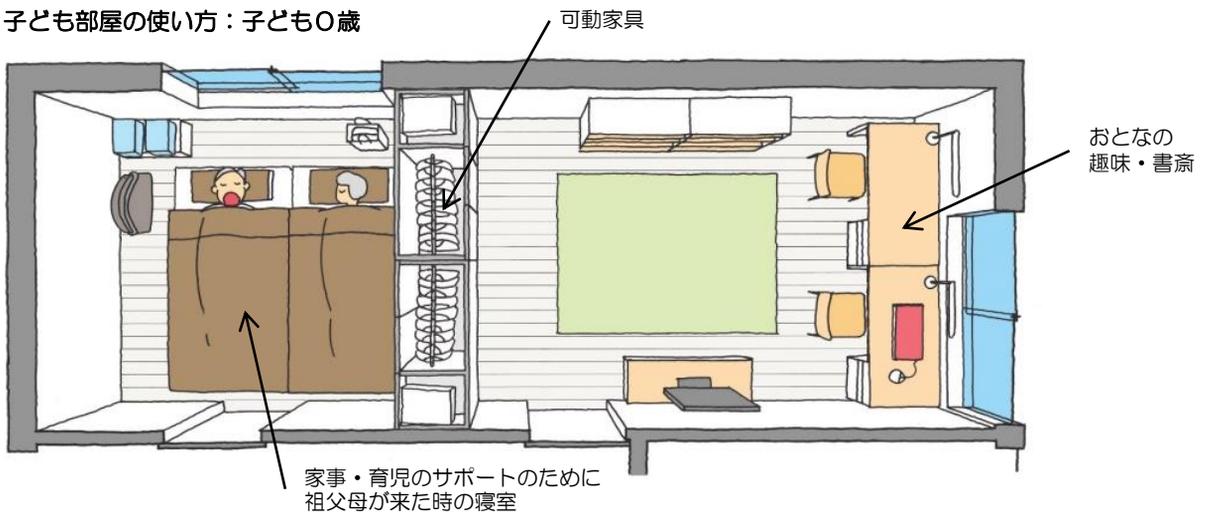
30-0 DEWKSの意識は、「子ども部屋」を子どもが専有するまでの期間は「おとなの多目的部屋」として捉えていることがわかりました。

そこで、こうした意識を踏まえ、可動家具を用いた子ども部屋の有効活用について提案します。

長期間住んだ場合の、子ども部屋の使い方の変化を見ていきましょう。

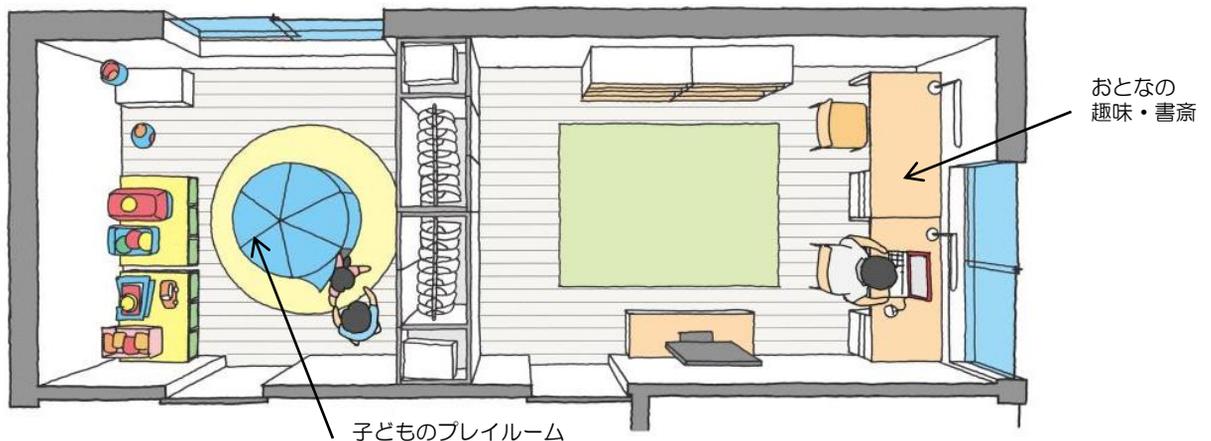
まず最初に、子どもが乳児期の小さい時期に、祖父母にサポートしてもらうことを想定した、客間としての使い方です。祖父母の寝場所を確保しつつ、親も自分たちの趣味スペースを確保しています。

■子ども部屋の使い方：子ども0歳



子どもが少し大きくなって、プレイルームとして使っている様子です。少し広めにあけているスペースを、おとなの書斎や趣味の場所としています。

■子ども部屋の使い方：子ども5歳・2歳

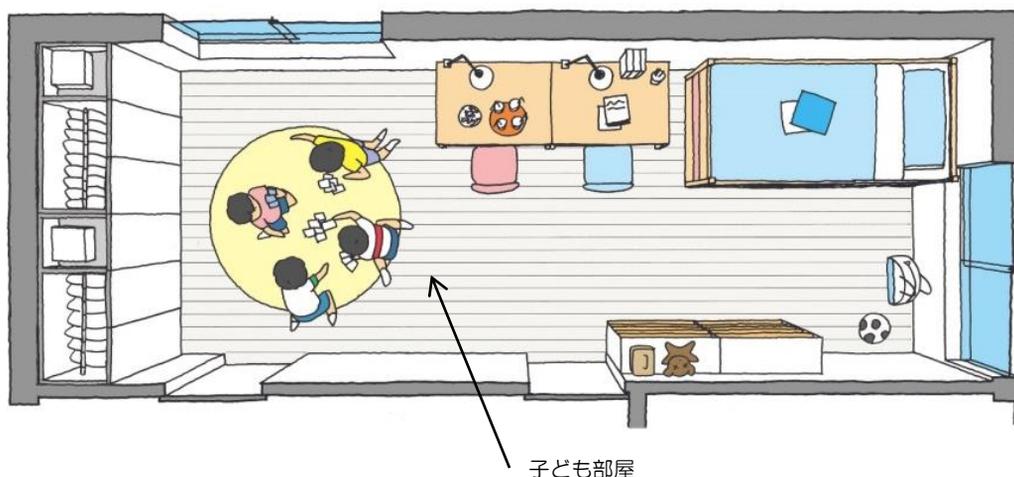


4-1. 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案 続き

4-1-2. 「子ども部屋」×「おとなの多目的部屋」の使い方変化の提案 続き

次に、収納を寄せて大きく一部屋とし、子ども部屋として使っている様子です。
子どもの友達が集まっても、広々遊ぶことができます。

■子ども部屋の使い方：子ども10歳・7歳



さらに子どもが成長し、一人につき一部屋を与える段階です。
それぞれに、部屋と収納が確保されます。

■子ども部屋の使い方：子ども13歳・10歳



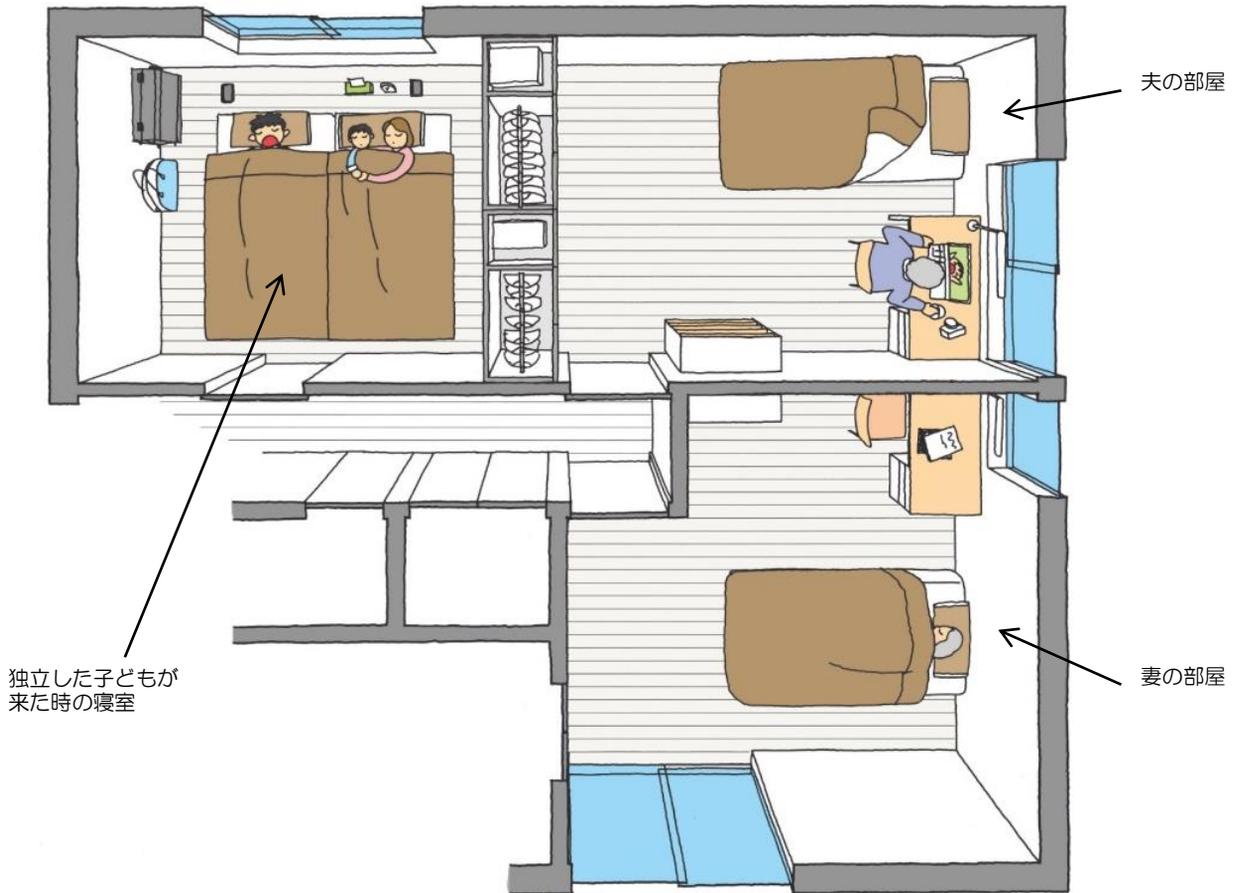
4 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案
 4 余白を活かした60年間の住みこなし

4-1. 30-0 DEWKSの暮らしに向けた提案 続き

4-1-2. 「子ども部屋」×「おとなの多目的部屋」の使い方変化の提案 続き

最後に、子どもが独立して巣立った後、家を建ててから30年程経った様子です。
 親は夫婦それぞれの生活リズムで、それぞれ一部屋確保しており、空いているスペースを帰省した子どもの
 家族が使うことができます。

■ 子ども部屋の使い方：子ども独立



子ども部屋は使い方を固定すると変化させることも一苦労ですが、収納が可動であることで、変化の難易度を下げています。

一方で、この「子ども部屋の使い方を変化させるストーリー」の考え方は、子ども部屋のプランニングの考え方を変えるものではなく使い方の提案であるため、従来のプランニングで完成された住宅にも十分適用可能です。

コラム：可動家具とは

可動家具とは、壁に寄せて子ども部屋を広く使ったり、子どもの成長に合わせて空間を仕切ったりと、シチュエーションに応じて移動させることができる収納です。

可動家具を部屋の仕切りに用いることで、部屋の使い方のバリエーションは広がります。



一方、可動する家具は、地震時の安全性が非常に重要です。

旭化成ホームズでは、可動家具を設置したヘーベルハウスを振動台に載せ、振動を加える「実大振動台実験」を行い、安全性を確認しています。



- 2002年
大林組技術研究所 実大振動実験
- ・振動台：3軸（縦揺れも含めた性能を確認）
 - ・主な地震波
 - ①EL Centro NS 100gal
 - ②EL Centro NS 160gal
 - ③Kobe（原波）
 - ④Kobe（原波×1.5倍）

調査報告書執筆者

旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所
共働き家族研究所長 木戸 将人

旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所
主任研究員 柏木 雄介

共働き30歳の
家づくりの意識

発行 2018年11月22日

発行所 旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所
共働き家族研究所

〒160-8345
東京都新宿区西新宿1-24-1 エステック情報ビル
電話 03-3344-7858

旭化成ホームズ株式会社



くらしノバージョン研究所
共働き家族研究所